

柳田國男古稀記念会から日本民俗学会の創設へ

——『古稀記念会覚書』『古稀記念会出席者覚』の

翻刻と分析を中心に——

板
橋
春
夫

はじめに

日本は、昭和十六年（一九四一）十二月八日のハワイ真珠湾攻撃によってアジア太平洋戦争へと突入していった。初期には戦果はあったが戦局はまたたくまに不利になってゆき、戦争は総力戦という新たな段階になっていった。戦時体制下では物資不足と食糧危機に陥り、人びとの日常生活は悪化の一途をたどった。そのような中であって、柳田國男の古稀記念会が企画・実施されたのである。一〇年前の還暦記念では「日本民俗学講習会」が開催され全国各地から参加者が集まって熱気にあふれていた。そして、「民間伝承の会」の設立と雑誌『民間伝承』の発刊に至ったのである。¹その後、順調に活動は続いてきたが戦時体制となり、民俗学界をめぐる環境は一〇年前とは著しく異なってしまった。

その戦時下、柳田の弟子たちは古稀記念会の企画・実施を模索していた。「柳田國男先生古稀記念会趣旨」によると、古稀記念事業は、①地方大会の開催、②外地大会の開催、③記念論文集の刊行、④雑誌『民間伝承』特集号の発行、の四本柱で構想されていた〔民間伝承の会編 一九四三 五〇～五三〕。しかし戦局の悪化に伴い、記念事業の多くは縮小あるいは中止・延期を余儀なくされた。

本研究は、戦時下の柳田國男古稀記念会の企画と実施の経緯を明らかにすることが目的である。その目的達成に向けて、以下の三点に分けて検討する。第一点は、成城大学民俗学研究所が所蔵する橋浦泰雄の『柳田國男先生古稀記念会覚書』と『柳田國男先生古稀記念会出席者覚』の翻刻を行うことである。本資料が多くの研究者に公開される意義は大きいと言えよう。第二点は、この翻刻を通して先行研究で曖昧にされた部分を明らかにすることである。関連資料を活用し、総合的な検討を試みたい。第三点は、古稀記念事業は敗戦によって中断したが、戦後まもなくその活動が復活し、日本民俗学会創設の動きと連動していった。そこで柳田國男の古稀記念事業を

戦後までの長いスパンで捉えながら検討する必要がある。

一 柳田國男古稀記念会に関する先行研究

柳田國男の古稀（数え七十歳）は、昭和十九年（一九四四）七月三十一日であった。従来の日本民俗学史は、たとえば牧田茂『柳田國男』のように柳田の生涯を紹介した書であっても、古稀記念事業はほとんど取り上げていなかった（牧田 一九七二）。それは参考とすべき基本資料の欠如によるものであると言える。そのような限定された状況の中で、戸塚ひろみは古稀記念事業に関する研究を進めた。この分野における探究は、戸塚の研究を嚆矢とする。

①戸塚ひろみ「第十章 第五節民間伝承の会」（『柳田國男伝』 一九八八年

戸塚論文は、『柳田國男伝』（一九八八年）に収載された「第十章 第五節民間伝承の会」である。戸塚は、雑誌『民間伝承』に掲載された「柳田國男先生古稀記念会趣旨」をもとに、『民間伝承』の編集後記に記された古稀記念会関連記事を丹念に拾い出して古稀記念事業の概要を明らかにした（戸塚 一九八八 八三三～八三七）。

②鶴見太郎『橋浦泰雄伝―柳田学の大いなる伴奏者―』及び「戦時下の「モヤヒ」―柳田國男先生古稀記念会」に見る―」（二〇〇〇年、二〇〇四年

鶴見太郎は、橋浦泰雄研究の過程で、橋浦が保管していた資料を発掘した。そして、『橋浦泰雄伝―柳田学の大いなる伴奏者―』（二〇〇〇年）を執筆し、その中で橋浦泰雄『柳田國男先生古稀記念会覚書』を紹介した（鶴見 二〇〇〇 一八一～一八二）。その後、鶴見は論文「戦時下の「モヤヒ」―柳田國男先生古稀記念会」に見

る」の中で、これらの資料を活用して、古稀記念会と還暦記念会との異なる点が二つあると指摘した。その第一点は、参加者を民俗学関係者に限定していなかったこと、第二点は、海外領土も事業の射程に入れたことであったと論じた（鶴見 二〇〇四b 四三）。しかし、橋浦資料は一般には見ることができず鶴見論文の検証は困難な状況であった。

③ 古家信平「まぼろしの国際共同研究」二〇〇一年

古家信平は、論文「まぼろしの国際共同研究」の中で、柳田が国際共同研究を提案したという視点から古稀記念会について言及した。古家は、記念会が企画した民俗学大会について、台湾における当時の実態を検討した結果、柳田の民俗学は台湾の研究者へは十分浸透しておらず、しかも戦局の悪化のため実現の可能性が薄かったと論じた（古家 二〇〇一 一一）。国分直一へのインタビューを活用した論文であるが、やはり資料的制約のある中での論述であった。『民俗台湾』三〇号の「座談会柳田國男氏を囲みて」をみると、金関は柳田や橋浦の意見に対して、交通状況は良くないが東京に限らず、満州や台湾で研究大会ができると語っている（柳田ほか 一九四三 七）。

④ 小国喜弘『民俗学運動と学校教育―民俗の発見とその国民化―』二〇〇一年

小国喜弘は、『民俗学運動と学校教育―民俗の発見とその国民化―』の中で、教育史の見地から大戦下の民俗学運動を論じ、柳田の古稀記念会を取り上げた。小国によると、戦時体制下に政府が日本民俗学を国政に有用な学問と認め、民間伝承の会はそれに応じて戦時体制への寄与を積極的に進めていったという。古稀記念会は「大戦の必勝」への寄与を大義名分に掲げており、時局に便乗したとの非りは免れないという。大東亜圏内における外地での民俗学大会の開催にもその意図が見えると指摘している（小国 二〇〇一 一一六―一一七）。

⑤王京『一九三〇、四〇年代の日本民俗学と中国』二〇〇八年

王京は、『一九三〇、四〇年代の日本民俗学と中国』（二〇〇八年）で、日本から中国と朝鮮へ赴いた民俗学者の活動を明らかにした。同書は五章から成り、第一章「日本民俗学の成立と中国」では、一九三〇年代の日本民俗学成立期に中国がどう関わっていたかを概説し、第二章は太田陸郎、第三章は大間知篤三、第四章は直江広治をそれぞれ取り上げた。そして、第五章「柳田國男先生古稀記念会―民俗学の再編成―」と続く。中国における研究動向を詳細に調査し、中国との関わりに留意しながら古稀記念会を日本民俗学史に位置付けた。満州国首都の新京が開催地として話題にのぼったのは、大間知の紹介で民間伝承の会に二〇名以上が入会したことも影響していた〔王 二〇〇八 一八二〕。

⑥福田アジオ『日本の民俗学―野』の学問の二〇〇年― 二〇〇九年

福田アジオは、『日本の民俗学―野』の学問の二〇〇年―（二〇〇九年）で「柳田國男古稀記念事業」の項目を立て、記念事業の計画から外地での民俗学大会について解説し、さらに記念論文集を紹介した。「台湾・朝鮮の民俗学」の項目では、『台湾民俗』と『朝鮮民俗』について述べた〔福田 二〇〇九 一七四―一八〇〕。

以上が主な先行研究である。鶴見が指摘したように、参加者の範囲拡大に留まらず、開催地に「外地」を含む企画があった。古稀記念事業は、外地の大会など国際的な内容を含み、日本民俗学の拡大も意図されていたのである。では、どのような企画が進められたのだろうか。次に橋浦泰雄が残した資料を翻刻した上で、検討してみたい。

二 『柳田國男先生古稀記念会覚書』の翻刻と解説

柳田の古稀記念事業を企画した中心人物の橋浦泰雄が書き留めた『柳田國男先生古稀記念会覚書』（写真1、以下『古稀記念会覚書』と表記）によって、古稀記念会の企画の詳細がわかる。橋浦の覚書を活用した研究成果に、鶴見太郎『民俗学の熱き日々―柳田國男とその後継者たち―』（二〇〇四年）がある。同書の「第五章古希に集う」は、柳田の古稀記念会の計画から実施までが詳細に記される〔鶴見 二〇〇四 a 七五―一〇一〕。

【資料①】『柳田國男先生古稀記念会覚書』

（表紙）

「柳田國男先生古稀記念会覚書 民間伝承の会」

（本文）

六月二十六日 発端

昭和十九年七月三十一日は柳田國男先生の古稀寿ノ誕生日につき、何等かの記念の催しをなすべしとの意見が昨年来今年初頭の頃より、木曜会内はもとより他学界間にも起つた。よつて此の希望を具現するとなると、余す処期日も一ケ年余しかないので、来る七月三十一日の先生の六十九回の

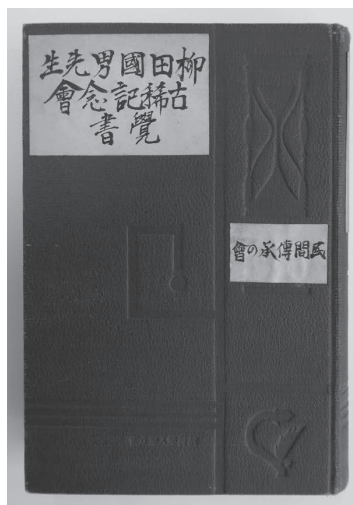


写真1 橋浦泰雄の『柳田國男先生古稀記念会覚書』（成城大学民俗学研究所蔵）

誕生日までに大体の成案を得る事が必要なので、まづ木曜会としての態度を決定する必要がある、本日その第一回協議会を開催した。

日時 昭和十八年六月二十六日

場所 新宿エーテル

出席者 大藤時彦 倉田一郎 連仏重寿 関敬吾 橋浦泰雄

協議事項

一、記念事業開催の可否

出来るだけ範囲を広く盛大に開催すること。但し決定は他の友誼学界の協助の容子^(様子)、及び先生の諒承を得たる上にて。

一、記念事業

(イ) 日本民俗学を一般に啓蒙宣伝する為め、且又民間伝承の会々員の学績向上をかねて、日本民俗学全国大会を東京に並びに出来得べくば、九州・近畿・東北の三地方に於て同地方大会を開催すること。

(ロ) 記念論文集の刊行

日本民俗学はもとより、先生の学恩の及べる範囲は極めて広範であるが、それ等のうち先生との縁故や、深かき人々の参加を求めること。但し日本民俗学界中には余りに多人数であるから、他学界に比しや、学績の高い人々に限定せざるを得ぬかも知れない。仮りに挙げて見た方々^②

(国語・国文・方言) 折口信夫氏 金田一京助氏 伊波普猷氏 西角井正慶氏 今泉忠義氏 高崎正秀氏

平山輝男氏 吉町義雄氏 東条操氏 高藤武馬氏 宮良当壮氏 金城朝永氏 藤原与一氏 野村伝四氏

金田一春彦氏 上野勇氏 斎藤清衛氏

(民族・考古・人類) 宇野円空氏 石田幹之助氏 梅原末治氏 金関丈夫氏 岡正雄氏 古野清人氏 小山

栄三氏 松本信広氏 永橋卓介氏 石田英一郎氏 杉浦健一氏 杉山寿栄男氏

(社会・地理・宗教・国史) 辻村太郎氏 小田内通敏氏 山口弥一郎氏 西田直二郎氏 柴田実氏 筑土鈴寛氏 堀一郎氏 有賀喜左衛門氏 喜多野精一氏 小寺廉吉氏

(日本民俗学) 小井川潤次郎氏 戸川安章氏 高木誠一氏 小林存氏 江馬三枝子氏 平山敏治郎氏 沢田四郎作氏 蓮仏重寿氏 牛尾三千夫氏 曾田共助氏 大藤時彦氏 倉田一郎氏 今野円輔氏 桜田勝徳氏 瀬川清子氏 関敬吾氏 能田多代子氏 橋浦泰雄氏 比嘉春潮氏 宮本常一氏 最上孝敬氏 和歌森太郎氏 大間知篤三氏 守随一氏 直江広治氏 大矢真一氏 角川源義氏 高谷重夫氏 鈴木東一氏 千代延尚寿氏 山口麻太郎氏 佐々木滋寛氏 源武雄氏 武田明氏 中山徳太郎氏 箱山貴太郎氏 清野久雄氏 奈良環之助氏 高橋文太郎氏 鈴木棠三氏 牧田茂氏 野口長義氏 三田村耕治氏 岩倉市郎氏 長岡博男氏 今井武志氏

(先生の友人・其他) 石黒忠篤氏 下村宏氏 杉村楚人冠氏 新村出氏 洪沢敬三氏 緒方竹虎氏 那須浩氏 小出満二氏 小野武夫氏 西岡虎之助氏 鈴木文四郎氏 孫晋泰氏 高田十郎氏 森口多里氏 浅野晃氏 小寺融吉氏 町田嘉章氏 今和次郎氏 中山太郎氏 大西伍一氏 水木直箭氏 中西悟堂氏 江馬修氏 伊奈森太郎氏 丸山学氏

以上が仮りに実現すると到底二三冊のうちに収めることは困難であらうから五六冊以上に及ぶであらうが、何冊になつても良いことゝすること。

但し内容は単なる先生への賞讃に留まるのではなく日本民俗学と各自の学問との連関についての論文であることを主眼とすること。

刊行期日・編輯方法等については後日に譲ること。

(ハ)「民間伝承」の記念特輯号刊行

現下最も重要とする題目を共同の課題として数号に互り特輯号刊行の事

一、折口博士と会談の件

以上の如き案は到底民間伝承の会のみの力では不足なので各学界の協賛を得なければならず、先生の承認も得なければならぬが、且又その為の実行委員会も設けねばならぬが、まづそれ一切の事前に、折口博士の協助を得て、その意見に従ふことが必要であるからその会談の機をつくること。以上折口博士との連絡、会談の日時場所共の決定は大藤氏に一任。但し当方出席者は今日の四名とする。

以上

七月十五日(土) 雨

折口博士と木曜会員との会談会

日時 七月十五日

場所 芝区赤羽橋 春岱寮

出席者 折口博士 大藤氏 倉田氏 橋浦氏 (関氏欠席)

一、協議事項

(イ) 経過報告(橋浦)

(ロ) 計画に対して折口博士賛成さる。尚前記計画に対して

(い) 出来るだけ範囲を広くして多くの人に参加して貰ふこと。

(ろ) 地方大会は三ヶ所と限らず、各地の同志を動かして各地で啓蒙の講演会を催すこと。そのためにはこちらにも講師隊をつくつて積極的に出動すること。自分もそれに参加すべし。

(は) 柳田先生の諒解はまづ木曜会の方より求めること、不承認の節は更らに自分が交渉すること。

(に) 実行委員は他学界からも参加するとしても実際の仕事は木曜会にてなされたし。

(ハ) 記念出版執筆者追加

中川善之助氏 橋本進吉氏 大場磐雄氏 肥後和男氏 安藤正次氏 和辻哲郎氏 阿部次郎氏 谷川徹三氏 藤井春洋氏 中村星湖氏 藤田徳太郎氏 白田甚五郎氏 斎藤茂吉氏 中谷宇吉郎氏 今村明恒氏 半田良平氏 穂積忠氏 尾崎恒雄氏 青木重孝氏 エーデル氏 周作人氏 錢稻孫氏 ビンケンスタイン氏 小林英夫氏 秋葉隆氏

(二) 実行委員推薦

折口博士 西角井正慶氏 石田英一郎氏 高藤武馬氏 大藤時彦氏 倉田一郎氏 関敬吾氏 平山敏治郎氏 橋浦泰雄氏

(ホ) 記念事業は敢て先生の誕生日を待つ迄もなく今年内に準備に着手して(なるべく早く) 明年早々より開始すること。

(ヘ) 先生の承諾を得たらなるべく早く実行委員会を開催すること。

以上

七月三十日(金) 晴

柳田先生承認

本日夕刻 大藤・倉田・関・橋浦の四名同道柳田先生を成城の自宅に訪問。橋浦経過と案の概略とを報告、

先生の御承諾を乞ふ。(民間伝承の会創立三十週年記念の意をも含めて)。

先生学界進展の為に承諾せらる。当方概案についての御意見。

(イ) 時局柄お祝ひ騒ぎ、気分は絶対に避けること。

(ロ) 時局柄全国大会は困難ならむ、東京大会も関東大会即ち地方大会の一つとしては如何。

(ハ) 記念論文執筆者中、自分より年長者及び全然学徒にあらざる人は遠慮せられたし。例へば小田内氏、緒方氏、下村氏、杉村氏、鈴木(文)氏等はそれである。奈良の野村氏は之又遠慮の方がよいか。

(ニ) 自分は昨今疲労して居るから、自分が先頭に立たなければならぬやうな活動、計画には参加しにくい。此の点考慮せられたし。

(ホ) 「民間伝承」の特輯(連続)はやり方によつては或は好成績を収め得べくよい案を得られたし。

(ヘ) 自分の特に望ましいのは、自分の学説中以前と今日では異なつて居るものが多々ある。これを探索して整理して貰へると一般の人々にも大変都合がよいと思ふ。

以上

八月七日(土) 晴

実行委員会準備小委員会

柳田先生の承認を得たので早速実行委員会第一回を開催すべく、その為めの小委委員会を開く。

場所 橋浦方

日時 八月七日午後三時より同六時迄

参加者 大藤氏 倉田氏 関氏 橋浦氏(以上四名)

協議事項

一、名称（仮案） 柳田國男先生古稀記念会

二、記念事業

（イ）日本民俗学地方大会開催

（1）先般行政上全国に八組の地方協議会が設けられたが、それを基準として、同地域内の会員（民間伝承の会）の自主的な活動と相俟つて開催のこと。

以上の外に出来得れば新京に於ても開催の事。

（2）その場合こちらからも出来るだけ都合して講師隊を派遣すること。

講師予選 折口博士 金田一博士 西角井氏 高藤氏 浅野晃氏 谷川氏 大藤氏 倉田氏 関氏

桜田氏 瀬川氏 宮本氏 最上氏 和歌森氏 平山氏 橋浦氏

（3）講師派遣の経費は地方自主の立前^{（建）}として、旅費と宿泊費は地元の負担を原則とすること。謝礼は有無適宜にまかせること。

（4）大政翼賛会その他の援助を受けること。

（5）明年早々より準備の整つた地方より開始のこと。

（ロ）記念出版

（1）書名（仮） 日本民俗学論叢（第一輯……………）

（2）原稿締切日 昭和十八年十二月末日

（3）編輯 同類の原稿の出揃ふのを待つてゐたのでは到底遅延するので、類別刊行は再版の節行ふこと、し編輯も其のつもりにて別頁開始のこと。最初寄つたものより刊行すること、但し予め各巻の釣合を考慮して行ふこと。

（4）三月第一輯を刊行。爾後隔月毎に一冊宛刊行のこと。

(5) 原稿の量は約五十枚(四百字)前後を標準とすること。

(6) 原稿類別についてはこちらから希望類別を記入して送ること。

(7) 紙質体裁等現在の最高を期すること。

(8) A5判約五百頁のもの五冊或は六冊の予定。

(9) 出版所 候補として一応左記のものを考慮のこと。

岩波 日本評論社 河出 創元社 六人社

右の内用紙その他好条件を確保し得れば六人社をして出版せしめること。

(ハ)「民間伝承」特輯号

氏神問題其他現下最も重要とする題目を選定し、共同課題として論文と資料とを募集すること。但し予めその重要点を挙示せる論文要項等を事前に掲載して好果^(効果)を収めることに努力すること。

特輯号は明年早々より発行すること、し、右準備に直ちに着手すること。

(二) 先生の著述年表をつくること。現在着手中の今野円輔氏に委託のこと。これは記念論文集中に収めると。

(ホ) 右年表の作成と相俟つて、過日先生の希望されたる学説の変遷についても解説に着手すること。

一、実行委員会

人員は先日予選の通りとし、委員長には折口博士になつて貰ふこと。これは編輯委員を兼ねること。折口博士の都合を聞いてなるべく早く第一回実行委員会を開催し、その決定を更らに柳田先生へ報告し確定案とすること。(折口博士との連絡は大藤氏)

一、実行委員会決定事項を執行する為に事務部を設けること。

部員 大藤、倉田、関、橋浦

一、記念会全体の発企人を設ける必要あり。予定人名

折口信夫氏 金田一京助氏 伊波普猷氏 石黒忠篤氏 新村出氏 洪沢敬三氏 石田幹之助氏 安藤
正次氏 東条操氏 西田直二郎氏 橋浦泰雄氏

一、記念会経費予算

予算は壹千円とす。

専ら木曜会員調達のこと、すれども、他より寄贈あらば受けること。今日申出のもの。

大藤氏三百円 関氏三百円 倉田氏五十円 橋浦氏五十円（以上合計七百元）

一、記念出版の印税使途

これは先生の意嚮^{（意旨）}によることながら、その一案として先生の等身大首像（ブロンズ）をつくり贈呈しては如何。制作者は高村光太郎氏或は佐藤朝山氏のうち。

以上

八月十七日（火） 晴

実行委員会 会場決定

午後大藤氏、橋浦来訪。折口博士の都合により第一回実行委員会を来る二十一日（土）夕開催したしとのことにて兩人にて荻窪桃山へ交渉に行き、同所と確定し、直ちに委員諸氏へ速達にて通報す。但し平山氏は京都在住なれば発信せず。

八月二十日 晴

石田氏実行委員辞退

石田氏実行委員を辞退さる、由通報あり、理由は未公表なれども、近日学士院を退きて、^(蒙古)蒙疆へ赴任することに内定し居り、残念ながら辞任すと。

八月二十一日(土) 驟雨あり

第一回実行委員会

日時 八月二十一日(土) 午後五時半より八時半に至る

場所 荻窪 普茶料理亭(米一人宛一合の割(七合)とビール六本を持参す。)

参会者 折口博士 西角井氏 高藤氏 大藤氏 倉田氏 関氏 橋浦氏(以上七名)

協議事項

一、橋浦経過報告並に協議事項の大要説明、尚本記録簿を回覧す。

一、概略承認さる。尚次の如き追加意見あり、且つ最後の決定は柳田先生の御意^(意向)に拠ること、決定。

(イ) 発起人会開催は時局柄困難(発起人各位繁忙の爲め皆の好都合の日を選定すること困難)なるべきにより開催を見合せ、順序としては発起人会開催後、実行委員を選出すべきなれど事情を具陳して前後となりしことを諒解を得ること。

(ロ) 実行委員会の決定は、大藤・倉田・関・橋浦以上四名の小委員会にて遂行のこと。新たに協議を要する問題起きたる時は文書その他の手段により実行委員に通報その意見を待つて決定のこと。

(ハ) 実行委員長は折口博士の承諾を得たり。

(ニ) 西角井氏初め他の実行委員いづれも委員たることを承諾さる。石田氏の辞退はやむを得ず。その代人は適任者目下選択困難なれば欠員のまゝとし、同方面の連絡原稿取扱ひの事務などは関氏を煩はすこと。
(ホ) 出版所は先生を尊敬し、本事業に誠意を有する所たるを要す。

(ヘ) 記念出版叢書の型はB 6 倍判型とせられたし。(参考同型9 1/2活字にて頁五十二字十八行詰) 紙質は出来るだけ上質のものを使用すること。

(ト) 発企人々選は小委員会案にてよきも尚先生の意見に従ふこと。高藤氏より尚橋本進吉博士を追加しては如何との議あり。

(チ) 予算一千円中今日までに決定せる分(収)は七百円なるが、その残余三百円を折口博士寄贈せんと御申出あり。但し他木曜会員よりも尚若干の拠出あるべきにより、右金額は暫定と見るべきか。又本基金会計のことは、木曜会員(小委員の四名の外桜田、宮本、瀬川、最上氏等)の外には暫らく公開せざること。寄付金を慫慂するやうな事態を生じては面白くないので。

(リ) 記念出版書名は、先生の考案を煩はすこと。

(ヌ) 第一冊は遅延せざるやうなるべく早く早く刊行すべし。

八月二十二日(日) 晴 三十一度

柳田先生への報告

橋浦昨夕第一回実行委員会の結果を報告し、それについての御意嚮^(意向)を承る為、八月二十二日午後三時成城町へ柳田先生を訪問す。

全体として承認さる。尚先生と協議の結果、左の追加案を得たり。

(イ) 新京へ若し講演隊出かけること、なるやうならば朝鮮、北京、台湾等も可能ならむか。一応之等とも連絡交渉して見ること、す。

(ロ) 発企人中に那須浩博士、和辻哲郎氏など如何か、相談して見ること。橋本博士は如何か。

(ハ) 寄稿依頼者追加

慶応英文学 西脇順三郎 同仏文学 井汲清治 同日本上代史 松本芳夫 学習院倫理豊川昇 山口
小川五郎 東畑 京都大槻正男

(二) 実行委員補充に小山栄三氏は如何か。宮本常一氏も。

(ホ) 記念品としての彫像は不向、且つ時局柄ブロンズは遠慮すべきか、若し強いて記念品を贈らるゝならば希望あり、自分の母の信仰せし地蔵郷里にありしが、欠損して久し、先年その再建を思ひたち、新海竹太郎氏に話して同氏の快諾を得ありしがその内間もなく同氏死去の爲め立消えとなり今日に及べり、それを再現し貰へば有難し。

八月二十七日(金) 驟雨あり

関氏橋浦会談

午後関氏橋浦宅来訪

実行委員に小山、宮本二氏追加の件賛成。小山氏は目下旅行中につき帰京の上は関氏連絡の^(ト)。印税を以て先生御希望の地蔵尊建立は賛成なるも尚残余金あるべきを以てその使途を考慮して置く^(ト)。

九月三日

発企人依頼の爲橋浦、渋沢子爵を自邸に訪問快諾を得たり。尚発企人として単なるロボットにては詮なき故支障にて出席者は少くとも一応発企会^(ママ)を催されたとの希望あり、又経費の必要あらば申つけられたしとの申出ありたり。

九月九日

京都平山氏へ発企人として西田先生、梅原博士、新村先生へ交渉すべく依頼中の処、西田、梅原両博士快諾されし旨来信あり。

九月十一日

大藤氏より石田幹之助氏発企人承諾の報ありたり。那須皓博士、石黒忠篤氏、和辻哲郎博士よりも書面にて快諾の旨橋浦回答ありたり。

九月十二日

金田一京助博士よりも快諾の旨通信ありたり。

九月十三日

高藤氏より橋本博士、東条操氏共に承諾されし旨来信ありたり。

京都新村出先生ヨリ記念会大賛成、なるべく広く参加出来るよう取計らへとの御希望ありたり。

九月十四日 晴

発企人会開催の件につき大藤、橋浦兩人同道にて國學院に折口博士を訪問、相談の結果来る二十一日（火）開催と決定す。同校にて西角井、石田幹之介^⑩両氏とも面談す。

九月十五日 驟雨時々あり。

二十一日発企人会へ出席を乞ふ為め、橋浦、洪沢子爵を自邸に訪問す。子爵同日先約の会合ありしもそれを謝絶と決してこちらへ出席のこと、決定さる。尚発企人に欠けし人なきやを慎重に考慮し、小野武夫博士を推薦さる。

大政翼賛会との連携を図る為め同会を橋浦訪問し、厚生部副部長小田倉一医博と協議の結果同氏の実行委員承諾を得、同氏の紹介にて実践局長藤井崇治氏の発企人たる承諾を得たり。但し両氏とも会代表としてにあらず個人の資格にてなり。それより橋浦神田一つ橋学士会館に至り、発企人会々場を約定す。洪沢子爵名義にて。

下保谷今和次郎氏を橋浦訪問。同氏の実行委員たる承諾を得、且つ札幌帝大総長今裕博士の発企人交渉を依頼す。同氏事後承諾にてよしとの諒解を得たり。

九月十六日

早朝、橋浦、小野武夫博士を小金井の自邸に訪問、発企人たる承諾を得たり。

発企人会開催案内書、記念会趣旨書草案、記念事業案仮案等の草稿、橋浦起草、大藤氏を訪問して添削を乞ひ、青木直記氏の尽力にてプリントに回付す。

九月十八日

関氏より小山栄三氏実行委員承諾の報あり。

発企人会開催（実行委員会も並会）の通知を全委員に発送す。

九月二十一日（火） 曇

別紙（写真2 発起人会の案内状控）の如く本日午後五時より学士会館に於て第一回発企人会開催。発企人、実行委員併せて二十二名出席。和辻博士は所用の爲め中座。那須博士又甲府行の爲中座されしも汽車に乗り遅れられ再来会の後、又出發せらる。会食後、実行委員長折口博士挨拶、記念会の趣旨を述べられ記念会への援助教導を懇望さる。橋浦事業案の説明をなす。大体に於て原案を承認さる。次の如き若干の付加修正ありたり。

一、記念事業中に民俗文献（雑誌・単行本）総覧、総索引の作製を加へては如何。雑誌（近い頃分）の索引は宮本常一氏により大分進行し居れり。（洪沢子爵案）

一、先年支那にて康熙字典を見てその好事業たるを知りたり、今日、我々にてなさば更らに優れたるものを作製すること可能なるべし、古来よりの民俗文献総目録を作製しては如何。（折口博士）

一、又先生のカード散逸し居れるが、これを防ぎ且つ出版したし。（折口博士）

一、外国との共同民俗学大会には、むろんこちらからの講師のみを押しつけるのでは無く、^{（双方）}相方より選出のつもりなり。（折口博士）

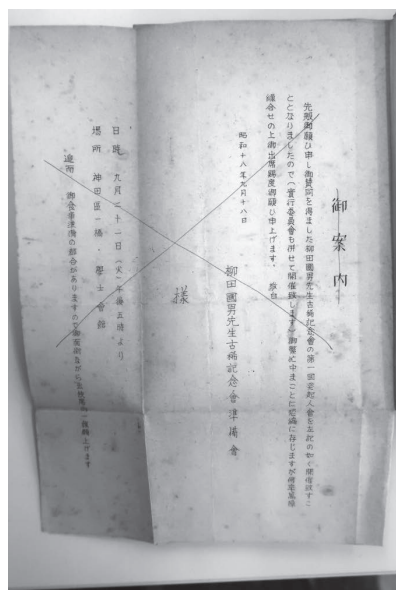


写真2 発起人会の案内状控（成城大学民俗学研究所蔵）

一、講師の旅費はこちら（中央）の負担にして、他の講師への謝礼、宿泊費等は開催地の負担としては如何。

（洪沢子爵）

一、レコードに先生の話を入れて置きたし。（折口博士、金田一博士）

一、北京にての大会は、周作人氏に連絡すること最も有効なり。実は先達で同氏に会談せし節、柳田先生招待のことを語りしに大賛成なりし故、同氏より当局に話あれば可能なり。（那須博士）

一、自分が近く渡支する故北京にては周氏に相談し、其他新京、京城へも立寄る故いづれへも連絡を取り来たるべし。（梅原博士）

一、先生は早く郷里を出でられたれば郷里への記念は殆どなく郷党も他の御兄弟の如く印象を深く居らざる如し。今回の事業の一つとして、何等か郷里へ付して記念物を作りたし。（折口博士）

一、原案には会計の項を欠きたるも、会計事ムは橋浦分担し、監査を洪沢、折口両氏にお願致したし。（橋浦）

一、以上の御意見は大体に賛成を得たるものとして、これを実行委員（委員長折口博士）に御一任願ひ、特別の事情生ぜる限り発企人会は頻催せざるにつき御諒承を得たし。（橋浦）

以上、決定の後、尚閉館定刻まで歓談を続行し、九時散会。

九月二十二日（水）

京都新村先生より速達。記念論文集に執筆の由申越さる。

柳田先生へ昨夜の報告す。橋浦。盛会を喜ばれ感謝せらる。

九月二十六日

（船橋）
今和次郎氏より札幌今博士発企承諾の由改めて通知あり。

十月一日

台北金関丈夫博士より来信あり、こちらの初信大和丸が遭難にて不着なりしかとあり。安藤総長共々発起人たることを快諾さる。これにて予定せし方々は一人残らず御快諾を得たり。

十月七日

金関博士より記念論文執筆者として安藤博士の外、左の人々を推薦して来らる。

移川子之藏氏 浅井恵倫氏 馬渕東一氏 池田敏雄氏 宮崎孝次郎氏 国分直一氏

十月十七日（日）晴 神嘗祭

金関教授台北より急遽上京され、柳田先生邸にて柳田先生、金関博士、岡田謙氏、中村哲氏、橋浦会合。「民俗台湾」を挙げて昨年は記念会の事業に協力すべき由を述べらる。さしづめ共同研究課題を民間伝承と共に民俗台湾にても行ふこと、民俗学大会の開催など。

十月二十日

記念会趣旨書、事業案、記念論文執筆依頼状などやうやくに出来。巻末の百数氏（住所分明分）に発送す。

新京の大間知篤三氏旅中の京城より通信あり、目下より／＼協議中の由申越さる。

十月二十一日

北京輔仁大学直江広治氏より来信あり。こちらの計画に呼応する為め急に計画中なりし、東方民俗研究会発会式を挙行し、同会主事橋川時雄氏と目下具体案協議中の由。尚周作人氏、エーデル氏、直江氏記念論文

執筆承諾済。錢稻孫氏にも近日交渉の予定、橋川氏を推薦し来たらる。民俗大会も賛成、宿舍は引き受けたとあり。輔仁大学民俗博物館発行の機関誌は明年度先生の為めの特輯号として発行すべく、既に計画中なりと。

十月二十四日

記念論文執筆承諾回答本日より到着す。第一着は伊波普猷氏、高崎正秀氏、小寺融吉氏なり、

十月三十一日 晴 風や、強し

六人社の招待にて江戸川々尻に舟遊。折口博士、大藤、関、橋浦、戸田兄弟六人。今日までの経過報告をなす。

十一月三日

執筆者追加分十五通発送す。

十一月六日

執筆追加分決定の為、柳田先生を訪問し三十五名追加す。発送。

柳田先生古稀記念論文集

小井川潤次郎 オシラサマの鈴の話 六七枚

秋葉 隆 山台戯 一五枚

肥後和男 自然と神 七〇枚

森口多里 化鳥考 三一枚（カット四枚）

山口弥一郎 おふくでん考 三八枚

伊藤泰雄 環境と生活の文化的意義 二八枚（カット入）

菊池 勇 岩手県に於ける被服の郷土的特色に就いて 二五枚（カット入）

土橋里木 言ひ負け狸 二五枚

小林 存 樹霊信仰の邦俗概観 四〇枚

西岡虎之助 上代土豪の歴史 四四枚

高木誠一 白鍬考 九枚

岩崎敏夫 氏と氏神 七六枚

梅原末治 考古学上から観た我が上代文物観に就いての覚書 三三枚

井上頼寿 氏神に就いて 一三枚

三田村耕治 近江湖北地方の「おこなひ」に就いて 三八枚

林 魁一 美濃国に於ける山の「こ」祭 五三枚

西園寺富水 予州道前周弥郡北条郷八幡宮八月二八日御頭文之事 六枚

高倉新一郎 松前年中行事 一八枚

武田 明 難題の趣向 二六枚

洪沢敬三 塩 八二枚

有賀喜左衛門 同族と親族 八九枚

藤原与一 対話の文末表現 一〇八枚

今野円輔 おしら神祭文 七一枚

山川菊栄 藤沢付近の農民生活 五三枚

桂井和雄 日本民俗の禁忌と呪術の中に表れたる一つの問題に就いて 四二枚（カット入）

椎橋 好 茶のある生活 三六枚

桜田勝徳 漁民と神幸 三九枚

戸川安章 羽黒山伏の集団組織 五〇枚

田窪信夫 灸治習俗の研究 三七枚

以上が昭和十八年（一九四三）の『古稀記念会覚書』の翻刻である。この資料は、鶴見太郎と王京に利用されて論文が執筆された。再確認するには民俗学研究所蔵資料を閲覧する以外に方法はなかったが、今回の翻刻によって記念会の経緯を再検証できることになった。特記すべき点を箇条書きでまとめておきたい。

①八月七日の大藤・倉田・関・橋浦の四名による準備小委員会で、「日本民俗学地方大会」を東京・東北・近畿・九州の四か所で開催することを計画した。そして、「以上の外に出来得れば新京に於ても開催の事」という記録を残した。いわゆる外地での開催は当然話題になったはずである。しかし戦局から実施困難と判断していたようである。それが「出来得れば」の表現となったのであろう。

②八月二十一日に第一回実行委員会を開催した。その席上、橋浦が小委員会の報告をしたところ、発起人会は開催が困難としただけで、それ以外は全体として承認した。この実行委員会では、いわゆる外地での開催に関しては話題にならなかったか、記録に残されていないかである。つまり、小委員会で話題になった新京だけの開催案で留まったと言える。

③そして、その結果を八月二十二日に橋浦が柳田へ報告に伺った。すると柳田から「新京へ若シ講演隊出かけ

ること、なるやうならば朝鮮、北京、台湾等も可能ならむか」と言われた。この発言は、柳田が新京以外の「外地」を話題にしたが、「可能だろうか?」というものであり、外地を入れて欲しいという発言ではないと思う。橋浦も「一応之等とも連絡交渉して見ること、す」と述べた。この記録をみる限り、筆者には積極的な発言とは読み取れない。言ってみれば、全体のバランスを考えたらどうかというに過ぎない発言であつたと考えておきたい。

④ 九月三日、十五日の両日、橋浦は洪沢敬三を訪問した。表記は「洪沢子爵」とある。洪沢は単なるロボットの飾り物ではなく、働きますよと言つたらしい。経費についても心配した発言をしている。発起人会の日取りに關しては先約を破棄して予定を確定したという。学生会館へは橋浦が予約に出かけているが、名義は洪沢であつた。洪沢は表には出ないで、最大限の協力をしていたことが理解できる記録である。

⑤ 発起人会は一か月後の九月二十一日に開催された。その会議で、折口信夫は「外国との共同民俗学大会には、むろんこちらからの講師のみを押しつけるのでは無く、相方(双方)より選出のつもりなり」と語り、洪沢敬三は「講師の旅費はこちら(中央)の負担にして、他の講師への謝礼、宿泊費は開催地の負担としては如何」と述べた。さらに那須皓が「北京にての大会は、周作人氏に連絡すること、最も有効なり。実は先達で同氏に会談せし節、柳田先生招待のことを語りしに大賛成なりし故、同氏より当局に話あれば可能なり。」と語つた。そして、梅原末治は「自分が近く渡支する故北京にては周氏に相談し、其他新京、京城へも立寄る故いづれへも連絡を取り来たるべし」と語つたのである。発起人会では、いわゆる外地の開催が具体的に話題になった。しかも、その斡旋をしてもよいという意見も出された。

⑥ 台湾の金関丈夫からの来信では、「初信大和丸が遭難にて不着」という記事も見えている。発起人会開催以降、戦局は日を追つて悪化していった。十月十七日は金関が急遽上京して柳田邸で、柳田・金関・岡田謙・中村哲・橋浦の五氏による座談会が行われた。古家論文に対して若干の補足になるであろう。橋浦の記録を見る限りでは、台湾との協力関係は古家が論じるほどではないようである。ちなみに、この座談は、『民俗台湾』三〇号

に座談会「柳田國男氏を囲みて」として掲載された。同誌二一五ページにわたる分量である。一人ひとりの語りは比較的長い。

柳田は、この座談会の中で「大東亜民俗学」という言葉を使った。この座談は速記による記録であるから発言自体は正確であると考ええる。一九九〇年代にこの部分だけを切り取って論ずる評論が出たのである。^③座談の中で柳田は、比較民俗学的研究を進めるにあたり、台湾はその研究条件がよく整っていると評価した。筆者は、その語りの文脈で柳田が当時日常的に使われていた「大東亜」に民俗学を付けて語ったと理解していた。つまり、「大東亜」というエリア（主として東アジア地域）における共通の研究課題を探るための発言と考えていた。金関は、座談では一歩踏み込んで、柳田に向けて実際に時局に協力するにはどのようなことができるだろうかと問うた。それに対し、柳田は言葉すなわち語彙研究は難しいが、頭にかぶる手拭い、靈地思想、耳塞ぎ餅、祖先崇拜などのテーマは可能だろうと語った〔柳田ほか 一九四三 四～六〕。

三 古稀記念会の企画と開催趣旨

(1) 木曜会で提案された古稀記念会の企画

今野円輔は「柳田國男と研究会——木曜会を中心に——」で、木曜会の話し合いの様子を記録化した。昭和十八年（一九四三）九月十二日（日）の木曜会第二一四回で、柳田の古稀記念会の話題が出た。その部分を以下に引用する（傍線筆者）。

橋浦

今日はもう一つ、重要な話があるんです。来年は（昭和一九年）先生が七十になられ、古稀になられますので、この間から協議していたのです。これは、独り全民俗学界のみならず、その他の人々から是非

できるだけ盛大にやってくれという声がたくさんありますので、皆さんの応援を得て、できるだけ有意義な計画をしようと思っています。そしてその名称は「柳田國男先生古稀記念会」……と。

先生 それは駄目だよ、ご免こうむるよ。(一同笑声)

橋浦 「民間伝承の会」もちょうど十年になるのですが、こっちの方は知らない人が多いのですが、先生のこととは皆知っており、先生ご自身の影響によって直接啓蒙されてきた人が多いのでして、大体発起人を十六名、その他に実行委員会を決めました。来年の一月早々から全国八ヶ所で地方の日本民俗学大会を開き、その他に、新京、北京、台北および朝鮮で大会を開きたいと思っています。これについては、折口(信夫)先生らは非常に熱心になっておられ、どんなことでも先頭に立ってやろうと、おっしゃっているくらいです。記念論文集は四六倍版で五、六冊になる予定です。もし計画どおりいきますれば、日本の学界未曾有の盛事だと思います。先生の誕生日は七月三十一日ですが、誕生日を待っていないで、正月早々からどんどん実行に移す考えております。

—— ついで役員諸氏の氏名、交渉の経過、その他、具体案の細目などの報告あり——

先生 ぼくはただ、古稀を標榜されるのは辛いですね。長い間我々の民俗学は縁の下の力持ちをして来たから大した事業だよ。確かに学界未曾有の仕事かもしれないね。民俗学は鹿の子餅のようなもんだから、外の学問がいくらでもくつついてくよ。

橋浦 大きい各雑誌社はもちろん、朝日新聞などでもできるだけの協力はしますといっていますし、民俗学関係の諸学会でも、そうしたことを機会に何か大きなことをやりたいという機運が見えますので、戦局に大きな変わりがない限り、この計画は可能だと思っています。

—— これについて、先生から、橋浦氏の説明による具体案とほぼ同じような考えが述べられた——

先生 金の点は色々大分いると思いますが、この間、坪田譲二君が来て、全く思いがけない金を五百円置い

で行ったんです。「日本の昔話を訳して頂いたから」というから「それはもうわけはない」と言っただが「何か先生、お金のいることはありませんか」といわれて、ふっと今度のことを思い出したもんだから「それじゃあ、もらっておこう」といつてもらったんだが、これは何に使ってもいい金ですから。

——この他、役員人事についていろいろ話あり——〔今野 一九七七 二八—二九〕

この記事を見ると、柳田は橋浦の古稀記念会に関する提案について、素直に受け入れている。一〇年前の還暦の時とはだいぶ異なった対応である。経費の心配をして五〇〇円を差し出すと語る。橋浦の『古稀記念会覚書』によると、六月二十六日から準備が進められ、七月三十日には柳田邸を訪問し、古稀記念会について相談のため訪問している。木曜会における祝賀会の話題は、今野が詳細に記しているが、実態としては予め相談が進められており、決定したことを報告したに過ぎない。古家が指摘したように「一種の儀式的感」がある〔古家 二〇〇一 一一四〕。

この日の参加者は、丸山久子・池田弘子・瀬川清子・今井武志・橋浦泰雄・和歌森太郎・大藤時彦・大矢真一・倉田一郎・関敬吾・星野・笹村ら一七名であったというが、今野論文では参加者のすべてを確認できない。橋浦・大藤・倉田・関の四人（小委員会）が含まれている。古稀記念会の各種事業を確認する場であったとも言えよう。

古稀記念会について実務的な相談を進めていたのは、大藤・橋浦・倉田・関の四名であり、その相談に乗ってアドバイスをしたのが折口であった。この古稀記念会は柳田の承認をもらってから実行委員会を開催する段取りになったことは言うまでもない。

今野の臨場感ある記録によって古稀記念会の準備内容が明らかになった。柳田は、ある程度感情を押さえたように見えるが、うれしさを隠しきれないようである。今野の記録で興味深い点は、柳田が「民俗学を縁の下の方

持ち」と認識し、「民俗学は鹿の子の餅」のようなもので、周縁の学問がいくらでも付着すると語ったことである。これは日本民俗学の性格を表現したように思われる。

橋浦は古稀記念の計画の中で、「外地」で民俗学大会を開催する企画を語っているが、海外での開催が視野に入るのは、大間知篤三が新京、直江広治が北京、金閼丈夫が台北で活躍していたからであった（『王京 二〇〇八一八〇〜一八九』。『民間伝承』九卷三号（昭和十八年七月）の「編集後記」で、翌十九年は会の創立十周年であり、かつ柳田が古稀を迎えるので内外の声に応えるべく祝賀会を協議中である旨が載る。

(2)「柳田國男先生古稀記念会趣旨」とその内容

『民間伝承』九卷四号（昭和十八年八月）には「柳田國男先生古稀記念会趣旨」が、以下のように発表された（傍線筆者）。橋浦が柳田に承認してもらったために柳田邸を訪問したのは、七月三十日であった。満六十九歳になる前日のことである。柳田は、時節柄華々しい催しではないと橋浦に念を押していた。

【資料②】 柳田國男先生古稀記念会趣旨

柳田國男先生古稀記念会趣旨

柳田國男先生は明昭和十九年を以て古稀の寿を迎へられます。

此の間永きに涉つて、先生が日本民俗学の創建と斯学後進の指導とに半生の情熱を傾倒せられたことは今更言ふ迄ありません。其の学恩は啻に日本民俗学にのみ留まらず、光被する所極めて広大であります。

依て我々相図つて、左の事業を成就して、先生の学恩の一端に酬いようとするものであります。

もとより大戦下单なる賀寿の挙は先生の固く辞まれる所で、我等も亦先生の意を体して飽く迄も学域に挺身奉公し、大戦の必勝を期するを大旨と致します。

冀くば大方諸賢の賛同を得て、此の記念事業を完了するよう切望致す次第であります。

昭和十八年九月

発企人（五十音順）

安藤正次 石黒忠篤 石田幹之助 伊波普猷 梅原末治 小野武夫 折口信夫 金関丈夫
金田一京助 今 裕 洪沢敬三 新村 出 東條 操 戸田貞三 那須 皓 西田直二郎
橋浦泰雄 橋本進吉 肥後和男 藤井崇治 和辻哲郎

実行委員（兼編纂委員）（五十音順）

委員長 折口信夫 大藤時彦 小田倉一 倉田一郎 小山栄三 今和次郎 関 敬吾 高藤武馬
西角井正慶 橋浦泰雄 平山敏治郎 宮本常一

記念事業

一、日本民俗学地方大会の開催

行政上の新設地区たる九地方協議会地区を単位として開催すること。該地区内の民間伝承の会々員並に地方文化団体等の自主的主催たることを原則とし、大政翼賛会其他の提携援助を仰ぐこと。

大会開催に伴ふ経費は中央部より派遣の講師の旅費は中央部の負担とするも、其他の経費は一切開催する地方の負担とすること。

二、内地以外に於ける民俗学会の開催

京城、台北、新京、北京、張家口等に於ける学会と提携連絡して開催すること。

一、二項の講師は中央及び地方より適宜選択するも、中央に於ては予め講師隊を編成して待機すること。

三、記念論文集の刊行

執筆依頼者日本民俗学内約七十名、学外約百名の予定にて、B六倍判四百頁前後のもの五、六冊以上刊行の見込。(一人原稿量四百字詰五十枚前後とする) 柳田先生年譜・著作年表・単行著書解説等を収録する。

四、雑誌『民間伝承』の特輯号連続発行

現時局下に最も必要とする主題を選定し、その資料の採集と論究とを組織的に行ひ、一ケ年間毎月連続して特輯号を発行する。以上の予定主題は次の如くである。

一月号 氏神、二月号 誕生、三月号 生死観、四月号 錬成と遊技、五月号 生産方式、六月号 家、七月号 社交と協力、八月号 祖霊、九月号 家庭教育、十月号 お祭り、十一月号 予覚と前兆、十二月号 結婚

以上の四項目共本年中に出来るだけ早く準備に着手し、明年早々より実行に移り、明後二十年の上半期中には一切を完了の予定とする。

会計事務には橋浦泰雄当り、その監査には洪沢敬三・折口信夫当る。

【資料②】によると、発起人は安藤正次（台北帝国大学総長）、今裕（北海道帝国大学総長、今和次郎の伯父）のような大学総長や著名な研究者、そして政財界で活躍する人物であり、柳田と深く関わりのある人物で構成されている。柳田と比較的馴染みが薄いと思われるのは藤井崇治である。藤井は通信省官僚として電気庁長官で退官した人物である。この時点では大政翼賛会実践局長を務めていた。監査には折口信夫と洪沢敬三が担当している。実行委員は、柳田と直接関連の深い民俗研究者と折口信夫の高弟西角井正慶らで構成された。小山栄三は社会学者である。高藤武馬は『方言』編集者（後、法政大学教授）で、柳田と長く交流を持つ人物である。その中で柳田との関わりが不明であった小田倉一であるが、小田について鶴見太郎は『橋浦泰雄伝―柳田学の大いなる伴奏者―』で、以下のように記している（傍線筆者）。

八月七日、橋浦、関、大藤、倉田の四名が委員となり、第一回委員会が開かれた。そして地方での協議会を設立すべきだが、一〇年前の橋浦の提案と同様、ここでも各地域の自主性に委ねるべきと決められた。また大政翼賛会の援助を受けることが決定され、九月一五日には橋浦が同会を訪問し、厚生部副部長の小田倉一に実行委員就任の承諾を得た。（鶴見 二〇〇〇 一八二）

小田倉一が実行委員になっているのは、会の運営について、大政翼賛会の援助を受けるために加えた結果であったことがわかる。王京によると、小田倉一は大間知篤三と東京帝国大学の同期生で医学博士である。大学時代は新人会に所属していたという（王 二〇〇八 二七三）。小国喜弘が指摘したように、「大戦の必勝」の趣旨からは戦争への協力の姿勢が窺える。戦時下の時局では、そのような文言を入れる必要性があったことも事実であろう（小国 二〇〇一 一一七）。実際に、発起人の藤井崇治（大政翼賛会実践局長）や小田倉一（大政翼賛会厚生部副部長）をメンバーに入れたのは、この企画が時局に迎合したと言うよりも、当時は開催のためにはやむを

得ない方法の一つであったと考えられる。

「柳田國男先生古稀記念会趣旨」は、上記で紹介したように、記念事業として以下の四つの柱を掲げていた。すなわち、①地方大会の開催、②外地での大会開催、③記念文集の刊行、④『民間伝承』特集号の発行、の四本柱であった。これら全事業は、昭和二十年（一九四五）上半期にすべて完了させるという意気込みも記された。会計事務に橋浦、監査に洪沢敬三と折口信夫が選任された。昭和十九年（一九四四）は、アジア太平洋戦争の真つ最中であり、趣旨書に大戦下であることが明記され、「大戦の必勝」の文言も入れられた。

① 地方大会の開催

東京以外の地方都市で開催することによって民俗学の普及に努めるという趣旨である。企画としては、仙台・東京・高山・長野・山梨・広島・松江・小倉・鹿児島次全国九か所で開催予定であった。実現したのは大阪市と朝日新聞社の共催で「戦時生活と日本民俗学」と題した講演会が開催されただけであった。この講演会には一〇〇〇人近い参加があったという〔戸塚 一九八八 八三六〕。

② 外地での大会開催

外地での大会開催は、当初は新京が民俗学大会の候補地になっただけであった。柳田の提案があつて朝鮮、北京、台湾へと拡大されて最後に張家口が加えられた〔王 二〇〇八 一八二〕。新京には大間知篤三と守随一、北京には直江広治、台北には金関丈夫、が現地に居たのであった。朝鮮には日本人と朝鮮人による朝鮮民俗学会が既に組織され、秋葉隆や赤松智城らが活躍していた。そして、張家口には石田英一郎がいた。現地との連絡不十分、時局の変化などから実現は不可能となった。

③ 記念文集の刊行

記念文集の刊行は、用紙の供給がないという切実な問題が起こっていた。計画では、民俗学関係が約七〇名、学外から約一〇〇名の予定で、B六判四〇〇ページの記念文集を五、六冊以上刊行予定と表明した。

④『民間伝承』特集号の発行

『民間伝承』特集号の発行は、時局に最も必要な主題を選定し、採集と論究の特集号を発行する案である。用紙の配給を気にしながら進められた。雑誌『民間伝承』の特集テーマのうち、「氏神」「生死観」「鍊成」は戦時下を想起させるものである。『民間伝承』九巻八号（昭和十八年九月）には再度、「記念会趣旨」が掲載された。雑誌の原稿募集記事が掲載され、「誕生」と「生死観」の執筆にあたっての注意事項と主題が記される。寄稿者はそれを参照しながら、自分の住む地域の事例報告ができるようになっていく。当初からの編集担当の守随一は満州へ赴任し、その後は橋浦が編集実務を担当していった。

四 古稀記念懇談会の開催通知と出席者

鶴見太郎は、『民俗学の熱き日々―柳田國男とその後継者たち』の中で、『古稀記念会覚書』を用いて、古稀記念会を論じた。しかし、昭和十九年（一九四四）十月八日開催の「古稀記念懇談会」に関しての言及は「柳田個人を祝ったものとして挙げられるのは一九四三年一〇月八日、泰明小学校講堂（東京都中央区銀座）で行われた祝賀会を数えるばかり」と記す程度である（鶴見 二〇〇四 七六）。なお、鶴見の文中にある「一九四三年」は「一九四四年」の誤まりである。

本研究では、橋浦泰雄資料の『古稀記念会出席者覚』と記されるノートに着目する。表紙には「昭和十八年一月、日本民俗学懇談会出席者覚、同十九年十月八日、柳田國男先生古希記念会出席者覚」と墨書される。署名は鉛筆書きがほとんどであり、本人の自著と思われる。一部にペン字が使用されているので、翻刻にあたって、該当部分を斜体字で、改ページはカギ括弧で示した。本資料は、開催当日の古稀懇談会の参加者を確認できるものであるが、後に見るように記載漏れもあり、古稀懇談会の参加者全員と断言するのは難しい。

(1) 古稀記念懇談会の開催通知

開催案内は印刷されて関係者へ発送された。それが以下の資料である。送付範囲は明らかではない。

【資料③】 柳田國男先生古稀記念会の案内通知

柳田國男先生古稀記念会御案内

主催 同記念会発起人会

同 実行委員会

柳田先生の古稀の寿を祝賀し累年の恩を謝し併せて大戦下に於ける日本民俗学の使命を確認する為めに左の如く記念懇親会を開催致します。時局下質実を旨とし華美を避けますが民間伝承の会員諸兄弟は万障御繰合せ御出席の程懇望致します。

日時 昭和十九年十月八日（日） 自午前十時至午後三時

場所 東京都京橋区数寄屋橋際（省線有楽町下車）泰明国民学校

主要話題 「日本民俗学の成長と将来を語る」

出席の諸先輩中より郷土会時代・民族時代・最近に洵り適宜お話しを願ふ。

食事 弁当御持参の事。但し共同食事として味噌汁を差上げます故容器をも御持参の事。尚汁の実用の材料少量と燃料用の小木片とを御供出下さらば幸なるも都合悪しき方はそれに及ばず

会費 右費用として一人一円宛 受付へお渡し下されし。

御注意 防空警報発令中は延期致します。但し同日午前九時までに解除の節は挙行致します。

御出席の方は左記へハガキにて御申越下さる方が準備上好都合であります。

以上

東京都杉並区久我山三ノ一〇八 民間伝承の会

この通知を見ると、「防空警報発令中は延期致します」とある。戦時下の切迫した状況が手に取るようにわかる。当日は味噌汁を振る舞うので、容器を持参して欲しいとあり、さらに材料と燃料があれば持参してもらいたいと書いてある。いかに厳しい状況の中で古稀記念懇談会が開催されたかが推測できるのである。

(2)『古稀記念会出席者覚』の翻刻

【資料④】 柳田國男先生古稀記念会出席者覚（写真3～8）

（表紙）

昭和十八年一月

日本民俗学懇談会出席者覚

同 十九年十月八日

柳田國男先生古稀記念会出席者覚

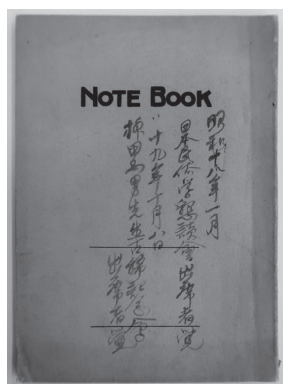


写真3 出席者覚ノート表紙

柳田先生古稀記念会 昭和十九年十月

八日。於泰明校

◎森 銑三

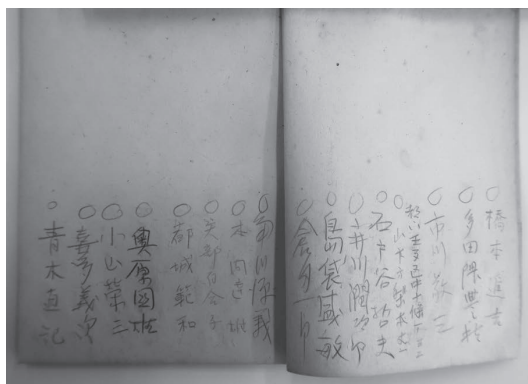


写真5 橋本から青木まで

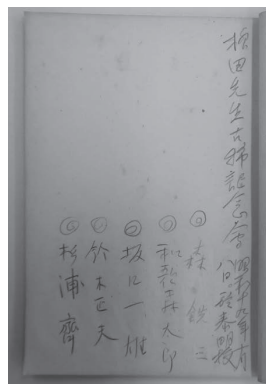


写真4 署名の書き出し部分

都下王子区十條一ノ三二
○山下方 梨本文一

石戸谷哲夫

○小井川潤次郎

○島袋盛敏

○倉田一郎

○角川源義

○本間達雄

○矢部百合子

○都城範和

○奥原國雄

○小山栄三

○喜多義次

○青木直記

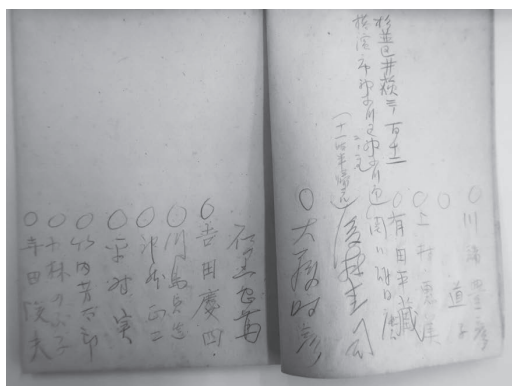


写真6 川端から寺田まで

杉並区井荻三ノ百十二
有田平蔵

横浜市神奈川区神奈川通二ノ二 関口皆磨
(十一時半帰ラル) 後藤圭司

○川端豊彦
○道子

○上村恵美

○大藤時彦

石黒忠篤

○吉田慶四

○川島貞造

○神藤正二

○平野 実

○竹内芳太郎

○小林のぶ子

○寺田俊夫

○大矢真一

○能田多代子

○石原綏代

○高藤武馬

○堀 一郎

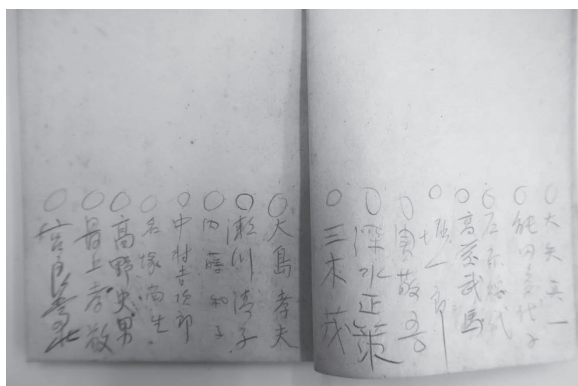


写真7 大矢から宮良当壮まで

会費6—

- 関 敬吾
- 深水正策
- 三木 茂
- 大島孝夫
- 瀬川清子
- 内藤和子
- 中村吉次郎
- 名塚尚生
- 高野史男
- 最上孝敬
- 宮良当壮
- 柴田勝
- 古田中正彦
- 石田弁助
- 鈴木棠三
- 高崎正秀
- 武田清澄
- 大藤ゆき子
- 坂本敏雄
- 武田久吉

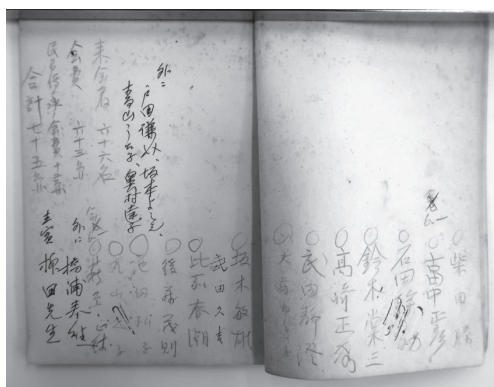


写真8 署名の最後の部分

【資料④】によると、名簿に載ったのは七二名である。そのうち「外二」と表記のある五名（斜体字で表記、戸田謙介・坂本よしえ・青山うた子・奥村達子）と「主賓柳田先生」の計六名を差し引けば、書いてあるように来会者六六名となる。戸田謙介は雑誌『民間伝承』の発行者である。女性たちはお手伝いの人であろうか。「会費六十三円」とあり、「民間伝承ノ会費 十二円」で、合計七十五円である。案内状に示されていた一人一円の会費を徴収したことが確認できる。そして、民間伝承の会から十二円の補助があったということであろうか。

外二

戸田謙介、坂本よしえ

青山うた子、奥村達子

○比嘉春潮

○後藤茂則

○池田弘子

○丸山久子

会費6— ○萩原正徳

来会者 六十六名

外に 橋浦泰雄

会費 六十三円

主賓 柳田先生

民間伝承ノ会費 十二円

合計 七十五円

五 古稀記念懇談会の内容

(1) 雑誌『民間伝承』の記録

古稀記念懇談会の全体把握にあたつて、『民間伝承』一〇巻七・八合併号が最も詳細である。同誌の奥付は、昭和十九年八月五日の発行とあるが、昭和十九年十月の記事も載っており、発行日と実際の期日に齟齬が生じている。昭和十九年（一九四四）十月八日に、中央区銀座の泰明小学校（当時は泰明国民学校）の講堂を会場に「古稀記念懇談会」が開かれたことは間違いないであろう。これに関しては、『民間伝承』一〇巻七・八合併号が参考になる。「学会消息」に「柳田先生古稀記念懇談会」の記事が載っている。全文を以下に紹介する（傍線筆者）。

○柳田先生古稀記念懇談会

十月八日午前十時から同午後四時迄京橋区泰明国民学校で開催された。前夜大暴風雨で案じられたが、当日は快晴で約百名の参加者があつた。折口信夫博士司会のもとに橋浦の記念会諸事業の進行^{（表）}情態、並びに民間伝承の会の現情^{（表）}報告があり、柳田先生の挨拶を兼ねられた日本民俗学の成長に対する感想談があり、続いて石黒忠篤氏の民俗学の黎明期とも云ふべき郷土会時代の詳細なる回顧談と、又柳田先生の他の一面即ち農政家、政治家としての紹介談があり、次いで橋本進吉博士の言語と民俗学との連関についての談話があり、それを終つて饗食、時局柄手弁当に味噌汁のみは大盤振舞ひをして共同食事の実を挙げた。午後は石田幹之助氏小山栄三氏の民族及び民俗学時代の回想談があり、それを終つて次には出席者全員の自己紹介と感想を披露したが、「年に数回でもよいからかうした会員の懇談会を開催せよ」「木曜会其他の研究会の談話を会誌へ掲載せよ」「民俗学に取つて資料の採集は極めて必要であるが、然しその資料の確実性については時に脆弱に

感じられるものが無いとは云へぬから、此の点に充分注意して正確を期して貰ひたい」等の希望があつた。最後に折口博士の長歌「遠野物語」の朗詠があつて閉会となつたが、此の日大詔奉戴日に当り、始終学的緊張裡に、而も和氣堂に満ちて、学志の上でも渾然一体となつて、使命に直往邁進せんとする熱意を固め、盛会に開散^散することが出来たのは大幸であつた。(民間伝承の会編 一九四四 三八)

上述の引用文は、文中の氏名に敬称を用いている。しかし、一か所だけ敬称がつかない。それは「橋浦」の部分である。敬称がないのは、この原稿が、編集者である橋浦が執筆したことを裏付けるものであろう。後述する『炭焼日記』によれば、前日は暴風雨で、朝は晴れたようである。「約百名の参会者」の記載は少しオーバーである。なお、橋浦の「出席者覚ノート」には、石田幹之助と折口信夫の二人は記載されていないが、折口は司会をするなど仕事を分担している。

(2) 丸山久子の『炭焼日記』のころ

味噌汁の大判振る舞いに関しては、当日参加した丸山久子が牧田茂編『評伝柳田國男』に「『炭焼日記』のころ」というエッセイで下記のように述べている(傍線筆者)。

昭和十九年十月八日、京橋の泰明国民学校で、民間伝承の会主催の柳田の古稀記念会が開かれた。交通の支障から主として関東の会員が數十人集まつたが、時節柄忘れがたい会であつた。ちょうど学校の給食室を使うことができたため、大きなお釜の中に皆が持ち寄つた野菜・鳥・魚など何でもかまわずみな入れて味噌汁を炊いた。筆者はこれをバケツに入れて柄杓でみんなのお椀について歩く役であつた。このあらあらしい世の中で行われた今日の会は、将来きつと思ひ出す時があるだろうとひそかに考えたのだったが、その翌日か

翌々日かの空襲のため、泰明国民学校は全焼してしまったのである。まことに夢のような世の中であった。「丸山 一九七九 二二一～二二二」

十月八日に開催された古稀記念懇談会は、戦時下のために物資は不足気味であった。泰明国民学校に集まった人たちは、持ち寄った食材を鍋に入れて味噌汁を作ったという。戦時下の窮乏している様子がわかる記念会であった。丸山のエッセイでは、泰明国民学校は記念祝賀会の数日後に校舎が全焼したとある。同校沿革史によると、昭和二十年（一九四五）五月二十四日の空襲の焼夷弾によって全焼したとあり、丸山の記憶違いと思われる。

(3) 柳田國男『炭焼日記』と『新国学談第一冊 祭日考』

柳田は、古稀記念懇談会のことを『炭焼日記』に以下のように記した（傍線筆者）。

十月八日 日よう 夜来風雨 朝に至つて霽る 夜又くもり降る

（以下）

泰明小学校の講堂を借りて記念会、会者六十人ほど、半分は始めての人。

石黒、橋本、石田、小山、武田などの諸君来り、いろいろ昔のことを話してくれる。折口君座長、十時すぎ始まり午時会食、四時半頃まで話をしてわかる。よき思出なり。

折口君から白い飯の弁当と魚、石黒君は足袋などをくれる。（柳田 一九五八 一三〇～一三一）

柳田は『炭焼日記』に「よき思出なり」と書いた。「会者六十人ほど」と参加者の数に関しては大雑把である。参加者の半分は初めての人とあるが、これは一体どういうことであろうか。「折口君座長」とあるので、折口が当日の司会を務めていたことがわかる。折口は還暦記念のときもそうであったが、重要な場面ではいつも代表と

して中心的役割を果たしていた。柳田が『炭焼日記』に書いた参加者であるが、「石黒」は石黒忠篤、「橋本」は橋本進吉、「石田」は石田幹之助、「小山」は小山栄三、「武田」は武田久吉であろう。戦時下で物資が困窮していたので、白飯の弁当と魚や足袋が貴重な品であった。

『新国学談第一冊 祭日考』（一九四六年）の巻末に「窓の灯」というエッセイが付いている。その中の「民間伝承の会消息」（一八七—一九二ページ）に、以下のような興味深い記事が載っている。関連すると思われる部分を引用する（傍線筆者）。なお、『新国学談第一冊 祭日考』は『柳田國男全集』一六巻に収録される（三一〇五ページ）。

この会の歴史を、最もよく知つてゐる者の、私は一人である。昭和十年の七月末、自分の還暦記念を名目として、始めての民俗学大会を東京に開いた際に、遠い地方から来た数十名が私の家に集まり、主人が弁当の世話か何かでうろうろしてゐるうちに、ちよつくら斯んな会を作ることを決議してしまつた。だめだよ続かないよと思ふさまけちを付けて見たのだが、さて成立したとなると手伝はぬわけには行かない。色々と世話を焼き気をもみ、又時たまは小さな文章などを出してゐる。最初はタブレット型の物足りない会報だつたが、それでも携はつた人々の意気込がよく現はれ、是がざつと六年続いたのは成功であつた。此形では街頭に進出し得られないといふ理由で、普通の雑誌の姿にかへた際にも、大正初年の郷土研究が再生したやうで嬉しかつたが、ともかくも私は前の時のやうな編輯者ではなく、云はゞ一種の名誉会員であつた。しかしさうかうするうちに紙の苦しみが始まり、それを何とかするには世話人の連名に、私の名が有るのを利用した方がよい場合が多くなり、最初からでない会員の中には私が作つた会でもあるかのやうに、思つてゐる人が段々出来て来た。一番心苦しく感じたことは、その雑誌の中に、私の七十歳を記念する講演会や特輯号、大きな記念論文集の計画などが、花々しく公表せられたことである。結構な又学問の爲にも利用し得られる企てで

はあつたが、自分はわざと前以て知らされず、其計画に口を出すことが出来なかつた。聴いて喜んでそれは痛快といつては見たもの、実はその頃にもう此計画は影が薄かつた。万一再りそこなへば学間の一つの蹉跌といふ他に、背後で糸でも引いてゐたかと思はれる者の、きまり悪さはたまるまいなと思つた。その万一があはれや到来したのである。善後策としてはこの三つの事業のうち、比較的緒に就いた論文集だけを、何とか物にして世に残させたいと、今日は蔭ながら苦心してゐる。是はその御顔触れによつておのづから、今まで範圍と限界がはつきりせぬと評せられた一つの学問が、内と外とから区切られて線が濃くなつて来ると思つたからである。会が平常に復して、もとの形のものを取続けるやうになるのには、今の状態では時間がか、らう。〔柳田 一九九 一〇二—一〇三〕

この記事は、古稀記念懇談会開催の翌年、つまり昭和二十年（一九四五）の年末に書いたものである。執筆時点では、雑誌『民間伝承』は休刊の状態であつた。柳田は「三つの事業」と書いたが、当初は四つの事業であつた。いつの間にか三つになつてしまつてゐる。この点に関し、王京は「戦前最も積極的に進められていた国外民俗学大会は消えてしまつたのである」と指摘した（王 二〇〇八 二二四）。

「国外民俗学大会」が最も積極的に進められていた事項であつたかどうかに関しては留保が必要である。国外民俗学大会が消えて、三つの事業に変わつてしまつたことは事実である。柳田は何も知らされていないような書き方をするが、橋浦は逐一柳田へ報告していたことは橋浦文書から明らかである。柳田の文章だけを見ると事実を誤つてしまふ。

六 柳田國男先生古稀記念文集『日本民俗学のために』

昭和二十年（一九四五）八月十五日に敗戦を迎えた。敗戦後の民主化の進展は、日本民俗学には追い風となった。戦後は、民俗学研究所の設立や日本民俗学会の創設など、その発展はめざましいものがあつた。

古稀記念会の重要な事業の一つであつた古稀記念文集は、戦後の用紙難のために刊行が大幅に遅れた。第一輯の刊行は、昭和二十二年（一九四七）二月であつた。このような背景の中で民俗学研究所設立の気運が出てきたようである。記念文集の完結は昭和二十六年（一九五一）になつた。この年は柳田の数え七十七歳の喜寿祝いに当たつてゐた。日本民俗学の記念イベントは、柳田の還暦、古稀、喜寿、米寿といった長寿儀礼の実践でもあつた。

戦時中は用紙の統制があり、廃業する出版社も出た。雑誌『旅と伝説』は、この用紙統制によつて廃刊となつた。雑誌『民間伝承』は、昭和十九年（一九四四）八月で休刊を余儀なくされた。そのような状況下、柳田の古稀記念事業の多くも実施困難となつた。地方大会は、大阪市と朝日新聞社の協賛で開催された。「戦時生活と日本民俗学」と題する講演であつた（戸塚 一九八八 八三六）。

戦後に刊行された『柳田國男先生古稀記念文集 日本民俗学のために』全一〇輯における論文名と執筆者氏名は、以下の通りである（写真9 『日本民俗学のために』全8冊）。

第一輯 昭和二十二年（一九四七）二月十日発行（九三ページ）

日本民俗学の創始者……………和辻哲郎^④

塩―塩俗問答集を中心として……………洪沢敬三

神奈川県藤沢付近の農民生活……………	山川菊栄
追ひ書き……………	折口信夫
第二輯 昭和二十二年（一九四七）二月十五日発行（二六ページ）	
同族と親族……………	有賀喜左衛門
オヤの社会性に就きて……………	山口麻太郎
白鯨祭……………	高木誠一
第三輯 昭和二十二年（一九四七）二月二十日発行（九四ページ）	
化鳥考……………	森口多里
笑話に就いての断想……………	森 銑三
難題の趣向……………	武田 明
言ひ負け狸……………	土橋里木
第四・五・六輯（合併号） 昭和二十二年（一九四七）十月十五日発行	
第四輯（二一七ページ）	
上代土豪の歴史……………	西岡虎之助
氏と氏神——相馬磐城地方に於ける——……………	岩崎敏夫
氏神に就いて——京都を中心として——……………	井上頼寿
近江湖北地方の「おこない」に就て……………	三田村耕治
第五輯（二〇〇ページ）	
考古学上から観た我が上代文物観に就いての覚書……………	
……………	梅原末治

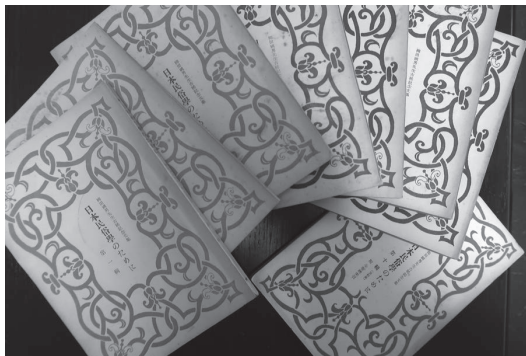


写真9 『日本民俗学のために』全8冊

漁民と神幸……………桜田勝徳

禁忌と呪術の中に表れたる一つの問題に就いて

……………桂井和雄

茶のある生活……………椎橋 好

第六輯（二〇二ページ）

自然と神……………肥後和男

耳塞餅……………大藤時彦

予州道前周桑北條郷八幡宮八月廿八日御願文之事

……………西園寺富水

美濃国に於ける山の「こ」祭……………林 魁一

第七輯 昭和二十三年（一九四八）九月二十日発行（九九ページ）

民俗学と人文地理学……………小寺廉吉

霜柱と氷柱——関東方言語彙研究の中より——

……………東条 操

樹靈信仰の邦俗概観……………小林 存

車田考……………青木重孝

第八輯 昭和二十三年（一九四八）九月二十日発行（一〇八ページ）

新野の雪祭……………小寺融吉

和泉の牛神と子供組……………高谷重夫

羽黒山伏の集団組織……………戸川安章

第九輯 昭和二十三年（一九四八）九月二十日発行（二〇九ページ）

山台戯……………秋葉 隆

サスヅクリ考……………竹内芳太郎

産屋について……………瀬川清子

おしら神祭文……………今野円輔

第十輯（完結篇） 昭和二十六年（一九五二）十月二十日発行

（二五四ページ）（写真10 『日本民俗学のために』第十輯表紙）

形態的に見た道祖神……………武田久吉

古代人の他界観念……………松本芳夫

松前年中行事……………高倉新一郎

オシラサマの鈴の音……………小井川潤次郎

大田植に於ける習俗とその祭式……………牛尾三千夫

柳田國男先生古稀記念文集完結に際して……………橋浦泰雄

第一輯の中扉に「柳田國男先生に捧げたてまつる」とある。そして、折口の「追ひ書き」によると、編さん委員は折口信夫・大藤時彦・小田倉一・倉田一郎・小山栄三・今和次郎・関敬吾・高藤武馬・西角井正慶・橋浦泰雄・平山敏治郎・宮本常一の計一二名であった。橋浦泰雄が当初企画した「四〇〇頁の大冊を五、六冊」には及ばないが、総ページでは一〇〇〇ページを超えた。用紙の調達が困難な戦後の混乱期にあって、全一〇冊のシリーズを刊行できたのである。

昭和二十六年（一九五二）十月十三日、十四日に國學院大学講堂で柳田國男の喜寿祝賀記念の会が開催された。



写真10 『日本民俗学のために』第十輯表紙

これは日本民俗学会第三回年会を兼ねていた。それにあわせて『柳田國男先生古稀記念文集 日本民俗学のために』第十輯（完結篇）が刊行された。この冊子には全巻総索引が付いている。第十輯の最後に、橋浦が「柳田國男先生古稀記念文集完結に際して」を記している。それによると、戦時中とは言え、東京・大阪・和歌山県勝浦町で講演会を開催できたという。小規模の研究会は西宮・新潟・その他三、四か所で開催したとある〔橋浦一九五一―一四一〕。橋浦の実務家としての面目躍如であった。

七 日本民俗学講座と『民俗学新講』

福田アジオは『日本の民俗学―「野」の学問の二〇〇年―』において、以下のように述べた（傍線筆者）。

敗戦から一年後の一九四六年九月から十月にかけて、柳田國男の古稀記念論文集刊行記念と『民間伝承』の復刊を祝って「日本民俗学講座」が開かれた。〔福田 二〇〇九 一八八〕

福田は、以上のように記したが、この記述には若干の誤謬がある。雑誌『民間伝承』は一一巻一号をもって復刊したが、その発行は昭和二十一年（一九四六）八月五日である。『日本民俗学のために』第一輯の発行は、昭和二十二年（一九四七）二月十日である。「日本民俗学講座」は、昭和二十一年（一九四六）九月の開催である。その時点では雑誌『民間伝承』は復刊したが、講習会開催時には『日本民俗学のために』は刊行されていない。

日本民俗学講座は、昭和二十一年（一九四六）九月二十八日、十月五日、十月十二日の毎土曜日、三回連続で開催された。杉本仁によると、この成功が民俗学研究所設立への道を大きく切り開くことになったという〔杉本一九八八 九七〇〕。しかし杉本は、この講座の成功と民俗学研究所の設立がどう結びつくのかは、典拠を示し

ていない。

初日（九月二十八日）は、午後一時三十分から関敬吾「日本民俗学概論」、池田弘子「食習の変革」、橋浦泰雄「日本家族制度」大藤時彦「民俗学の参考文献」が一時間ずつ行われた。二日目（十月五日）は、和歌森太郎「再建されるべき日本歴史」、今野円輔「民俗学の方法」、柳田國男「現代科学と云ふこと」が講義され、三日目の十月十二日には、瀬川清子「婦人の地位」、牧田茂「青年の社会」、折口信夫「先生の学問」の講義があったという（杉本 一九八八 九七〇～九七一）。

『民間伝承』一一巻二号の表紙裏に「講座会員募集」の記事が掲載される。『民間伝承』一一巻二号に掲載された講演タイトルと、杉本の文章にはごくわずかな違いがある。「表1 日本民俗学講座の日程表」を掲げておく。募集人員は二〇〇名で、会費は、一般一五円、会員一〇円である。会場は、靖国神社境内の旧国防館講堂である。『民間伝承』一一巻二号の「編集後記」は、橋浦が執筆しており、日本民俗学講座関連について、以下のように記している（傍線筆者）。

別項の如く本誌の復刊と柳田先生の記念文集の刊行を記念して「日本民俗学講座」を開催することに致しました。又その前後に関東地方の会員大会も開催する予定で、これは後報しますが、共に奮つて御参加願ひます。尚記念文集の刊行は若干遅れてゐますが、十月中に

表1 日本民俗学講座の日程表

	13:30～	14:30～	15:30～	16:30～
9月28日	日本民俗学概論 関 敬吾	食習の変革 池田弘子	日本家族制度 橋浦泰雄	民俗学の参考文献 大藤時彦
10月5日	再建さるべき日本 歴史 和歌森太郎	日本民俗学の方法 今野円輔	現代科学と云ふ こと 柳田國男	質疑応答 柳田先生を囲みて
10月12日	婦人の地位 瀬川清子	青年の社会 牧田 茂	先生の学問 折口信夫	質疑応答懇談

（「講座会員募集」『民間伝承』11巻2号、をもとに作成）

は第三輯迄出る手筈故暫くお待ち願ひます。〔橋浦 一九四六 三三〕

日本民俗学講座は、橋浦の認識のように、雑誌『民間伝承』の復刊と柳田記念文集の刊行を記念した講習会であった。靖国神社の旧国防館が会場というのも興味深い組み合わせである。講習会の記録『民俗学新講』は、昭和二十二年（一九四七）十月三十一日に明世堂書店から発行された（写真11『民俗学新講』表紙）。用紙は酸性紙で紙質は劣悪である。『民俗学新講』の目次は、下記の通りである。必ずしも当日の講義そのままではなく、担当者 が改めて書き下したと注記される。

現代科学といふこと……………	柳田國男
日本民俗学の資料……………	今野円輔
再建さるべき日本歴史……………	和歌森太郎
食習の変革……………	池田弘子
漁村民俗の研究に就て……………	桜田勝徳
主婦権について……………	瀬川清子
青年の社会……………	牧田茂
民俗学の参考書……………	大藤時彦
先生の学問……………	折口信夫

目次を見ると、橋浦が抜けて代わりに桜田勝徳が執筆に加わった。瀬川清子、大藤時彦、今野円輔のタイトルは若干変更になった。折口の「先生の学問」は、古稀を迎えた柳田を顕彰する内容となっている。柳田が持つ近

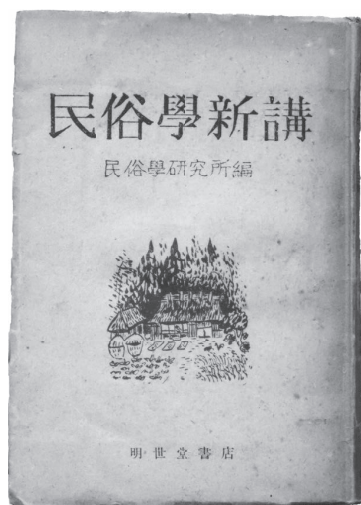


写真11 『民俗学新講』表紙

世隨筆の膨大な知識から明治四十年代の『後狩詞記』『石神問答』『遠野物語』を著した時期の苦しみの時代を経て、Folkloreの本に行き当たり、新しい学問を樹立する座みの苦しみを紹介した。折口は、柳田の学問を評し、「先生の学問は『神』を目的としてゐる」と語った〔折口 一九四七 二八二〕。これは古稀記念会が盛大に開かれて大勢の前で語りたかったことなのであろう。

日本民俗学講座は、その後すぐに第二回が開催された。『民間伝承』一一巻三号の「学会消息」によると、第二回は十月二日、九日、十六日の三日間、同じ場所で開催され、講師は折口、関、最上、石田、直江、能田、桜田、丸山の八名であることが紹介された〔橋浦 一九四六 三三〕。講義題目と日程表の詳細は明らかではないし、なぜ第一回に接近して開催されたのか。会場の定員を超えるほどの申し込みがあった可能性が考えられるが、これも今後の課題であらう。

八 民俗学研究所の設立と活動

(1) 研究所の設立経緯

木曜会は、昭和九年（一九三四）一月から続いていたが、戦争の激化のために、昭和十九年（一九四四）八月で休会となった。敗戦まもなくの昭和二十年（一九四五）九月九日に再開された。雑誌『民間伝承』は、敗戦一年後の昭和二十一年（一九四六）の八月号から復活した。メンバーの多くが平日の午後に参加するのは難しくなり、木曜会の会合は第二、第四日曜日の午後からの開催に改められた。木曜会は民俗学研究所の設立にあたって、昭和二十二年（一九四七）三月十三日をもって発展的に解消した。『民間伝承』一一巻四・五合併号の「学会消息」に詳しく記される〔民間伝承の会編 一九四七 三八〕。

木曜会の解散後その集まりの会は、民俗学研究所の例会に引き継がれた。民俗学研究所では、第二日曜日を研

研究会、第四日曜日を談話会と称していた。この第四日曜日の談話会は、現在の日本民俗学会に引き継がれている。杉本仁は、民俗学研究所の創設について、以下のように述べた（傍線筆者）。

柳田が民俗学研究所の創設を決意したのは、昭和二十一年（一九四六）の暮れで、朝日新聞記者の牧田茂（一九一六）と、毎日新聞記者の今野円助（この当時は円輔）（一九一四～一九八二）の二人の門下生のたび重なる慫慂によるものであった。時潮に敏感な職業柄、牧田と今野は価値観の転倒により放心状態にあった知識人たちが、その状況から脱して、知的営為を始めたのを見るにつけ、日本民俗学もたおくれまいと、研究所の設立を進言したのであった。（杉本 一九八八 九六九～九七〇）

柳田が民俗学研究所の創設を決意するきっかけは、民俗学を学んだ牧田茂と今野円輔という若い新聞記者の助言であったという。この記述の出処は不明である。敗戦直後にアメリカ軍の占領政策によって東京近郊の水洗トイレのある大きな邸宅が接収された時期があった。世田谷区役所から依頼があったという。この件について、鎌田久子（かまた・ひさ）／一九二五～二〇一一）が書き残している。役所と折衝したのは牧田で、住居ではなく書庫であると説明して接収を免れたとされる。牧田と今野の努力があり、書齋を民俗学研究所にすることができたという（鎌田 二〇〇二 一三四）。その結果かどうかは不明であるが、民俗学研究所の設立準備は、若手の牧田茂・直江広治・今野円輔の三人が当たった。

(2) 民俗学研究所の出版物

民俗学研究所は、出版によって運営費の一部を調達する計画であった。予定された出版物は『民俗学辞典』『全国民俗誌叢書』『綜合日本民俗語彙』、そして社会科叢書の企画であった。昭和二十四年（一九四九）に『民俗学

辞典』の編集企画が持ち上がり、項目選定などかなりのハイペースで進み、文部省の科研費補助を受けて刊行した。柳田は、大変熱意を示したと言われるが、実際に柳田が執筆したのは「序」と「にらいかない」だけであった〔井之口 一九七九 一三九〕。

山口麻太郎は、山村調査ではモノグラフを先に提示してから総論に向かうべきだと論じた。その批判がある程度反映させた結果が『全国民俗誌叢書』であり、民俗学研究所から以下の七冊が刊行された〔井之口 一九七九 二四一〕。

柳田國男『北小浦民俗誌』三省堂 一九四九年

宮本常一『越前石徹白民俗誌』三省堂 一九四九年

瀬川清子『日間賀島民俗誌』刀江書院 一九五一年

今野円輔『松枝岐民俗誌』刀江書院 一九五一年

大間知篤三『常陸高岡村民俗誌』刀江書院 一九五一年

桜田勝徳『美濃徳山村民俗誌』刀江書院 一九五一年

最上孝敬『黒河内民俗誌』刀江書院 一九五一年

柳田は、倉田一郎が採集手帖に記した内容を利用して一冊の民俗誌を作成した。それが『北小浦民俗誌』である。柳田は佐渡へ行ったことはあるが、北小浦に関しては船の中から眺めただけである^⑤。

『綜合日本民俗語彙』全五巻は、昭和二十九年（一九五四）から編集に着手し、完結は昭和三十一年（一九五六）であった。民俗語彙の発案は、柳田自身が行ったものであり、昭和二十二年（一九四七）の民俗学研究所世話人会の席で明言しており、「民俗学研究所の成り立ち」にも文章として残っている〔井之口 一九七九 二四八〕。

離島調査は、山村調査、海村調査と一連の調査であったが、山村調査の批判や反省のもとに、当初から調査地ごとにまとめる工夫がされた。完成するのは昭和四十一年（一九六六）で、『離島生活の研究』として刊行された。一七名の調査員が一九か所の調査地の報告をした。

九 日本民俗学会創設のエピソード

日本民俗学会は、「回顧と展望―民俗学会創設のころ―」という企画を立てた。鎌田久子は、第一回目のゲストスピーカーであった。鎌田は「日本民俗学発会のころ―柳田国男の周辺―」という題名で語り、出席者からの質問に応えている。それらが原稿起こしされ、雑誌『日本民俗学』二二九号のフォーラム欄に掲載された（鎌田二〇〇二―一三―一四八）。

昭和二十四年（一九四九）三月一日の夜、折口信夫は柳田の肖像画を届けるために民俗学研究所を来訪した。折口は民俗学研究所に入るときに、入口のドアを背にして両膝を揃え、やや腰をかがめて「ごきげんよろしう」と挨拶して入った。柳田は「こっちに來たまえ」と正客用の椅子をすすめた。その日は、理事たちが集まり、折口を学術会議会員に推薦するためには「民間伝承の会」の名称では他学会と並べられない、と堀一郎が発言した。その件に関しては折口から柳田へ説得してもらおうとしていた。そのタイミングに折口が訪問したのであった。鎌田久子はその一部始終に立ち会い、当夜の記憶を以下のように語った（傍線筆者）。

絵を喜んでいた柳田に対し、理事たちは他の諸学会とのかねあい、あるいは文部省の意向などを語り、この際民間伝承の会を日本民俗学会と改称することを話題にしていた。折口はお祝いに來たのであるが、この話題の中にすんなりと入り、理事達の主張を受け入れていた。しかし柳田は次第に機嫌が悪くなり、何故今変

えなければならぬのか、と頑として理解できないと言ひ張つた。ストーブもない三月の初めの寒い時で、柳田の語気だけが空にとぶそんな雰囲気であつた。しかし部屋全体はしんとして誰も身じろぎも出来ない様子であつた。その時、折口は立ち上がり、やや腰を低くして、これから勉強してゆく若い研究者の爲、「民間伝承」だけでは通用しなくなる。世の趨勢として、日本民俗学会に改称してほしい、若い人の爲に譲つてほしいと、それは静かな声で柳田に懇願されていた。何秒位たつたであろうか、柳田は突然立ち上がり、横のテーブルにあつた本を叩きつけ、語氣するどく「折口君、僕がどんな思いで民間伝承の会を作つてきたか……君なんかに分かつてたまるか！」と、それは私などのみたこともないおそろしい先生の雰囲気であつた。成り行きに、立つことも、座ることも出来ない理事達はじつと身じろぎもできない一時であつた。すると折口は間においてそれは静かな、低い声で「一番よく分かつております。誰よりも一番よく分かつております」と心にしみるように答えておられた。それから何秒か、音のない時がすぎて、柳田は突然荒々しく草履の音をたてて二階に上つてしまわれた。フエルトの草履の音は、大袈裟に言えば家中にひびくような音だつた。柳田を案じて身体が動かないというのが実感だつた。しばらくして立つたままの折口が、静かに腰をおろし、「これで日本民俗学会が生まれました」と、呆然としている理事達に声をかけられた。一番右端にいた大藤が、「ありがとうございました」と頭を下げておられたが、その時やつと人心地がしたというか、息を吸うことが出来るという感じであつた。

部屋の片隅に何も出来ず立ちつくしたままの私に、折口はただ「二階に行つてきて下さい」といわれ、私は先程の柳田の怒りと、荒々しい足音を思い、折口の用件も聞かずに二階の柳田の部屋に伺つた。するともう本を開けてる柳田は、先程の怒気はどうしたのかと思うほど優しく、「皆どうしたの、折口君は帰つたの」と言われる。ここでも私は先程の衝撃から立ち直れず、深々と頭を下げて降りてきた。柳田の言葉をそのまま折口に伝えると「これでよろしいのです」といつて下さつたが、これが昭和二十四年三月一日夜、日本民

俗学会が生れた時であった。〔鎌田 二〇〇二 一三七〕

このくだりは、まるで映画のシーンを観ているようである。柳田は時代の趨勢に抗ろうとする孤高の老研究者として描かれる。柳田は折口との会話の途中で急に苛立ちをみせ、机を叩いて席を立った。柳田を見送った折口は「これで日本民俗学会が生まれました」と静かに語ったという。⁽⁶⁾「民間伝承の会」は柳田の命名であった。「○○学会」と名乗って学術団体らしさを表明する時代に迎合しただけと言ってしまうばそれだけのことであるかもしれない。わずか十数年間で名称変更となったのだが、柳田にしてみれば、長い間にわたって「民俗学」という言葉の使用に禁欲的であった。ある意味では外堀を埋められたような外圧によって、ようやく民俗学会の名称を認めざるを得ない状況にあったということであろう。

まとめ

本研究では、成城大学民俗学研究所所蔵の橋浦泰雄『柳田國男先生古稀記念会覚書』と『柳田國男先生古稀記念会出席者覚』の翻刻を行い、それらの資料と公刊された資料を用いて、柳田國男古稀記念会の企画と実施のアウトラインを明らかにすることができた。今後は翻刻資料等を活用したさらなる研究の深まりが期待される。翻刻を信用するとすれば、巷間に伝えられている内容と若干異なっている点が見られる。特に、いわゆる「外地」における大会は通説に対して修正の必要性を迫るものである。

昭和十八年（一九四三）九月十二日の木曜会で、橋浦泰雄から柳田の古稀を祝う事業構想が示された。柳田は還暦の時とは異なり素直にその申し出を受け入れた。しかも、日本民俗学の発展のためとして印税の寄付を申し出たのである。民間伝承の会が企画した古稀記念会の内容は、①地方大会の開催、②外地大会の開催、③記念論

文集の刊行、④雑誌『民間伝承』特集号の発行、の四項目であった。

「古稀記念会趣意書」によると、日本が「外地」に進出した時代背景もあって、外地における地方大会の開催が検討された。その点では、日本民俗学は比較民俗学の展開も構想されていたことになる。この外地での大会に關しては、評論の分野から座談における柳田の発言の一部を捉えて「大東亜民俗学」を表明しているという厳しい指摘があり、雑誌『民俗台湾』の評価がひっくり返るような影響を与えた。

橋浦文書と『民俗台湾』三〇号の座談会記事をていねいに読むと、当初は戦局を不安視した上で可能であれば新京での開催という程度の素案であったことが判明する。それを柳田に示したところ、柳田は意見としてバランスを考慮して他の外地の開催も話題にした。それを受けた橋浦は可能であればという程度で引き取ったのである。しかし、發起人会では、その外地開催の件が話題になったということであろう。これも従来指摘されていることであるが、戦後の日本民俗学界では外地大会の開催を忘却したように、比較民俗学構想は消失することになった。その原因究明も課題の一つになるであろう。

古稀記念懇談会は、京橋の泰明国民学校を会場に開催された。戦時下であったので参加者は食料と燃料を持ち寄り、国民学校の給食室で味噌汁を作った。参加者にとっては心温まる催しであったようである。しかし、一〇年前の還暦記念の時の差が大きすぎる。戦局の悪化から古稀記念事業はその多くが縮小あるいは中止・延期を余儀なくされ、そして敗戦となった。戦後は急速に民主主義の空気が広まる中で、民俗学研究所が設置されるなど民俗学界に追い風が吹いてきたのであった。大きな動きは、柳田の数え七十七歳を祝う喜寿記念を待つことになる。

昭和二十四年（一九四九）三月五日発行の『民間伝承』一三卷三号に「会告」が掲載され、委員と在京の評議員の協議で「民間伝承の会」の会名を「日本民俗学会」と変更したこと、民俗学研究所は学会の外郭団体として活動を継続し、雑誌『民間伝承』の誌名はそのままとしたことが記された（『民間伝承の会編 一九四九 一九』）。

九学会連合の共同調査には「民間伝承の会」の名称で参加していたが、他の八学会が「〇〇学会」と学会名を名乗っていたので学会名変更の必要があった。しかし、柳田は名称変更に積極的ではなかったのである。その間の事情は、鎌田久子が語った日本民俗学会創設のエピソードで明らかになった。

昭和二十四年（一九四九）四月一日、正式に民間伝承の会は日本民俗学会と名称変更した。役員体制は、会長を柳田國男とし、委員に堀一郎、大藤時彦、和歌森太郎、萩原龍夫、竹田旦の五名が選ばれた（「民間伝承の会編一九四九 一九」。会則で興味深いのは「第七条 本会に左の役員を置く」の欄に「会長一名 初代会長を柳田とし任期を定めない」と記された点であった。役員選出方法では顧問と評議員が会長の委嘱で選任という会長専決事項であった（『日本民俗学会編 一九四九 一三三』。日本民俗学会は、柳田没後は会長制を用いず「代表理事」の役職を置いた^⑦。柳田國男の古稀記念事業の企画とその実施は、戦中から戦後に引き継がれたために、戦後の日本民俗学会創立や研究の発展拡大への重要な橋渡しの役目を果たすことになったと言えよう。

《注》

（1） この日本民俗学講習会の開催経緯とその成果に関しては、拙著『日本民俗学の創成と確立―椎葉の旅から民俗学講習会まで―』で詳述したので参照されたい。

（2） 鶴見太郎は『民俗学の熱き日々―柳田國男とその後継者たち―』の「第五章古希に集う」で、柳田國男古稀記念会を詳述し、章末に執筆予定者一覧を載せた（鶴見 二〇〇四a 九九―一〇二）。原本と照合すると、「民族・考古・宗教・国文」の項目では「梅原末治」が脱落し、「先生の友人其他」の項目では、「中山太郎」が「中村太郎」となっている。なお、同項目に「藤田徳太郎」が記されているが、該当箇所には見当たらない。

（3） 川村湊は、『大東亜民俗学』の「虚実」において、『民俗台湾』三〇号の座談会で柳田國男が使用した「大東亜民俗学」という用語を取り上げて、柳田は大東亜民俗学の構想をしていたと批判した（川村 一九九六）。雑誌『台湾民俗』は戦後も高い評価を得ていたが、この「大東亜民俗学」批判によって同誌の評価が一変する事態となった。座

談会記録を見ると、柳田は「これは大東亜圏民俗学ともいふようなもの」などと発言している。しかし、この前後の語りをていねいに読むと、それは比較民俗学に置き替えられる用語であり、時局を考慮した使用例とも理解できる。この用語の使用例だけで、柳田が大東亜民俗学構想をしていたとするのは難しいと考える。なお、呉密察は「川村湊は柳田国男を囲んだ座談会の中から『大東亜民俗学』という言葉を抜き出し、これをきっかけに柳田国男を批判した。しかしこの座談会を注意深く読めば、『国民民俗学』を主唱した柳田国男は『大東亜』というような広大な地域の民俗比較に関しては立場を留保していることが見出せる」と述べている（呉 二〇〇二 二五八）。また、文化人類学者の植木弘子と三尾裕子の二人も、川村の見解を表層的な解釈であり断定的に語ることは難しいと論じている（植野 二〇一二 一〇二―一〇三、三尾 二〇〇五 一四五）。

(4) 『日本民俗学のために』第一輯の巻頭論文の和辻哲郎「日本民俗学の創始者」は、第一三回朝日文化賞受賞記念における紹介講演の再録である。和辻は柳田と郷里が近く、古くから交流があった。和辻は原則として講演を断る学者と言われているが、柳田の受賞時には特別に講演を引き受けたという（菅野 二〇二三 二九七―二九八）。

(5) 『北小浦民俗誌』をめぐるのは、篠原徹「世に遠い一つの小浦」（一九九〇年）、松本三喜夫『柳田国男の民俗誌―『北小浦民俗誌』の世界―』（一九九八年）、福田アジオ編『柳田国男の世界―北小浦民俗誌を読む―』（二〇〇一年）、福田アジオ編『北小浦の民俗―柳田国男の世界を歩く―』（二〇〇二年）などが出て、民俗誌のあり方を含めて議論が深まった。これに関しては、別稿で論じる予定である。

(6) 鎌田久子は、このエピソードを鎌田の古稀記念論集『民俗的世界の探求―かみ・ほとけ・むら―』の巻頭論文「蓑笠―さ、やかな昔―」でも簡潔に取り上げている（鎌田久子先生古稀記念論集編集委員会編 一九九六 三五―三六）。

(7) 日本民俗学会第二十六期（二〇〇四年十月―二〇〇七年九月）は、宮本袈裟雄が代表理事であった。この第二十六期理事会が担当した、平成十七年（二〇〇五）十月八日の第五七回年会における評議員会および総会において会則改正案が提示されて承認された。この総会でようやく「代表理事・会長」と正式に変更された。なお、この時に役員の任期は三年とし、連任を二期までとした。そして理事の任期は通算七期を超えないものとする、と改められた。こ

の総会決議によって「会長」が四十数年ぶりに復活したのである（『日本民俗学会編 二〇〇六 一三四～一四〇』）。

〔付記〕

橋浦泰雄の『柳田國男先生古稀記念会覚書』『日本民俗学懇談会出席者覚』『柳田國男先生古稀記念会出席者覚』は、成城大学民俗学研究所蔵である。閲覧・撮影に際し、民俗学研究所の職員の皆さんにお世話になった。記してお礼申し上げる。

《参考文献》

- 板橋春夫 二〇二四 『日本民俗学の創成と確立―椎葉の旅から民俗学講習会まで―』 七月社
井之口章次 一九七九 『民俗学研究所』 牧田茂編『評伝柳田國男』 日本書籍
植野弘子 二〇一二 『民俗台湾』にみる日本と台湾の民俗研究―調査方法の検討を通じて― 『東洋大学社会学部紀要』 五〇巻一号 東洋大学社会学部
王 京 二〇〇八 『一九三〇、四〇年代の日本民俗学と中国』 神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議
折口信夫 一九四七 『先生の学問』 民俗学研究所編『民俗学新講』 明世堂書店
折口信夫編著 一九四七～一九五一 『日本民俗学のために』 一輯～十輯 日本民俗学会
鎌田久子 一九九六 『蓑笠―さ、やかな昔―』 鎌田久子先生古稀記念論集編集委員会編『民俗的世界の探求―かみ・ほとけ・むら―』 慶友社
鎌田久子 二〇〇二 『日本民俗学会発会のごろ―柳田國男の周辺―』 『日本民俗学』 二二九号 日本民俗学会
川村 湊 一九九六 『大東亜民俗学』の虚実』 講談社
菅野覚明 二〇二三 『柳田國男』 清水書院（新書）
小国喜弘 二〇〇一 『民俗学運動と学校教育―民俗の発見とその国民化―』 東京大学出版会
呉 密察 二〇〇二 『民俗台湾』 発刊の時代背景とその性質』 『台湾の「大東亜戦争」』 東京大学出版会

- 今野円輔 一九七七 「柳田國男と研究会―木曜会を中心に―」『女子聖学院短期大学紀要』九号 女子聖学院大学
 篠原 徹 一九九〇 「世に遠い一つの小浦」『国立歴史民俗博物館研究報告』二七集 国立歴史民俗博物館
 杉本 仁 一九八八 「民俗学研究所の発足」柳田国男研究会編『柳田国男伝』三一書房
 鶴見太郎 二〇〇〇 「橋浦泰雄伝―柳田学の大いなる伴奏者―」晶文社
 鶴見太郎 二〇〇四 a 「民俗学の熱き日々―柳田国男とその後継者たち―」中央公論社（新書）
 鶴見太郎 二〇〇四 b 「戦時下の「モヤヒ」―柳田国男先生古稀記念会―に見る―」『人文学報』九一号 京都大学人文学研究所

文学研究

- 戸塚ひろみ 一九八八 「民間伝承の会」柳田国男研究会編『柳田国男伝』三一書房
 日本民俗学会編 一九四九 「日本民俗学会会則」『民間伝承』一三卷四号 日本民俗学会
 日本民俗学会編 二〇〇六 「日本民俗学会会則改定について」『日本民俗学』二四五号 日本民俗学会
 橋浦泰雄 一九四六 「学会消息」『民間伝承』一一卷三号 民間伝承の会
 橋浦泰雄 一九五一 「柳田先生古稀記念論文集完結に際して」『日本民俗学のために』十輯 民間伝承の会
 福田アジオ 二〇〇九 「日本の民俗学―「野」の学問の二〇〇年―」吉川弘文館
 福田アジオ編 二〇〇一 「柳田国男の世界―北小浦民俗誌を読む―」吉川弘文館
 福田アジオ編 二〇〇二 「北小浦の民俗―柳田国男の世界を歩く―」吉川弘文館
 古家信平 二〇〇一 「まぼろしの国際共同研究」筑波大学民俗学研究室編『心意と信仰の民俗』吉川弘文館
 堀一郎編 一九四九 「日本民俗学会会則」『民間伝承』一三卷四号 日本民俗学会
 牧田 茂 一九七二 「柳田國男」中央公論社（新書）
 松本三喜夫 一九九八 「柳田国男の民俗誌―「北小浦民俗誌」の世界―」吉川弘文館
 丸山久子 一九七九 「炭焼日記」のころ 牧田茂編『評伝柳田國男』日本書籍
 三尾裕子 二〇〇五 「民俗台湾」と大東亜共栄圏「東アジア」の時代性 溪水社
 民間伝承の会編 一九四三 「柳田國男先生古稀記念会趣旨」『民間伝承』九卷四号 民間伝承の会

民間伝承の会編 一九四四 「柳田先生古稀記念懇談会」『民間伝承』一〇巻七・八合併号 民間伝承の会

民間伝承の会編 一九四七 「学会消息」『民間伝承』一一巻四・五号合併号 民間伝承の会

民間伝承の会編 一九四九 「会告」『民間伝承』一三巻三号 民間伝承の会

柳田國男 一九五八 『炭焼日記』 修道社

柳田國男 一九九九 「新国学談第一冊 祭日考」『柳田國男全集』一六巻 筑摩書房

柳田國男ほか 一九四三 「座談会柳田國男氏を囲みて―大東亜民俗学の建設と『民俗台湾』の使命―」『民俗台湾』三〇号 東都書籍

神奈川大学大学院歴史民俗資料科学研究科非常勤講師
放送大学客員教授

成城大学民俗学研究所研究員

